
プロメテ = オートマティクス Promethee Automatics

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロメテ「オートマティクス Promethee Automatics

【Nコード】

N4065W

【作者名】

木野目理兵衛

【あらすじ】

これは選ばなれなかった、もう一つの贈り火の物語 心燈バイアとい
う字義通りの命の灯火を見出した人類は、企業が管理、運営する都市国家にて擬似的な不老不死と、器の研究が齎した自動機械に寄る生活を享受していた。そんな中、十五年前に他者の心燈を手に掛けた罪で囚われの身となっていたというヴィクター・ナイトは、企都ボリスを襲っている正体不明の怪人《禿鷹》討伐を条件に企業より解放された。頼もしくも恐るべき改造を施された肉体と、電気仕掛の侍女

メアリを宛てがわれた彼は、今、薄暗闇を駆けて行くのだが
【空想科学祭2011企画参加作品】

・もう一つの贈り火（前書き）

本日は第四回空想科学祭参加作品『プロメテIIオートマティクス Promethee Automatics』をお読みに来て頂きましたして、真に有難う御座います。

間もなく開頁となりますが、ここで幾つか諸注意が御座います。

・小説を読む時は、部屋を明るくして離れて読んでください。

・企画より長編と聞いて来た方へ。明記上、当作の文字数は八万前後となっておりますが、その内の二割余りは本文を装飾するだけのただの何の変哲も無いルビです。虚偽もどうかと思いますが、まあこれも嘘偽り無き嘘と致しまして、無視して頂ければ幸いです。

・この作品はフィクションです。実在する神々、英雄、神話等とは一切関係ありません。

・等など。階段の既知では御座いますが、どうかご注意の方をして頂いてからに当作をお読みください。それではどうぞ、どうぞ、どうぞっ！！

・もう一つの贈り火

……我はここに座り、人間を

我が姿に似せて作る。

我と同じものどもを、

苦しみ、泣き、

楽しみ、喜び、

そして貴様を敬わないのだ、

我と同じ様にして！

ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『プロメテウス』

「……しかし自分の友や親戚は何処に居る？ 私の赤ん坊時代を見守ってくれた父も、笑顔で愛撫してくれた母も無かった、もしあったとしても、私の過去の全生活は今では一つの汚点、全くの空白であって、私には何も解らなかった。自分の最初の記憶以来、私は今の通りの大きさだったし、未だかつて自分に似た人間、或いは自分と交際しようという人間に、会った事が無かった。自分は何者だろう？ この疑問が再び起きて来た、しかも答えは無くただ唸るだけの事であった」

メアリー・シェリー『フランケンシュタイン 或いは現代の^{モダン}プロメテウス』

安心と信頼の、由緒正しき書き出しに敬意を称して曰く

昔々ある所に、一柱の神が居た。

彼は という事はつまり男性神な訳だが 元々神々の敵対者たる巨人族の出身だった。二つの種族が一方を片っ端から亡きものにしようとした時、先見の明を以て神々の側に付いた彼は、しかし

心の底まで彼等の味方では無かった。数多の動物と、神々の似姿たる人間の造り手、創造主でもあった彼は、傲慢不遜で鼻持ちならぬ神々より我が子等と呼んで差し支えない者の肩を持ったのだ。例えば、天上一の浮気者が火遊びを禁じたにも関わらず、人間の為に火を取り戻したのは彼であるし、その浮気者を完膚なきまでに破壊させる証拠を握り込んで決して離さなかったのも、また彼であった。

お陰でその神話は傷だらけの酷い代物で、正気の者にはちよつと見るに忍びない。

彼がその永い永い半生の内に、専ら付いていた神性を知っているか？

その答えは 鳥の餌遣り係である。

付け加えておくと、ここで言う鳥とは獰猛極まりない禿鷲であり、鳥の餌には、彼自身の新鮮な肝臓が使われていた。出身がどうであれ神々の一柱であれば彼もまた不死であり、昼日中にどれだけの量が貪られようと、夜ともなればあつと言つ間に何もかもが蘇ってしまう。経営者からすれば、実に面倒の無い素敵な永久機関だったのである。

そしてそんな彼の名が、我々の宇宙の言葉でプロメテウス。『先を見通す者』『熟慮する者』であつたのは、正に皮肉としか言えない。或いはそこに、浅薄な脳味噌では到底思いも寄らない深い考えがあつたのかもしれないが。尤も、彼の身体がレバーペースト缶と化した大元の原因は、深慮浅慮の如何というよりも、ある種の頓智と言つべきであらう。

それはこの様な逸話に由来する。

ある時、天下一の浮気者こと神々の中で最も偉そうで、まあ實際地位は高かつた神。このまま名無しなものも厄介だが、昨今騒がしい神の点呼の問題もあれば、ここは仮に『ゼウス』とだけ呼ぶ事にする。と人間の間で、牛の肉の取り分に置ける争いが勃発した。どちらも牛肉が大好きであれば、美味い所は、神ノ人になんぞへ

渡したくない。

一触即発の状態の中、調停役へと名乗り出たのが、何を隠そうプロメテウスだった。

先にも上げた通り、彼は人間の産みの親であり、その采配もまた人間鼻祖のものであれば、今回も人間の為に一計が案じられたプロメテウスは、牛を二つに解体すると、そこに細工を施した上で、あたかも公正であるかの様に、ゼウスへ選択をさせたのである。

片や皮革と胃袋に隠された、肉と内臓。

片や脂身を巻き付けられた、ただの骨。

シンキングタイム
良くお考えに……我等神の中の神よ

外面と内面を逆転させた偽装工作は実に秀逸なもので、プロメテウスは見事食べられない骨の方を選ばせる事に成功した。やったねエウロペ拉致少女、今夜は高級ステーキだっ。

けれど陰謀に置いては、ゼウスの方が一枚上手だった。

彼はこう言ったのである　不死たる神に取っては、不滅の骨こそが相応しい、と。

実際これが裏の裏をかいいた結果なのかただの負け惜しみなのかは、いまいち解らない　何せ相手は天下一の策略家でもある　けれどこの言葉に寄って、勝敗は決した。

かくして神々是不死なる者と、人間は死せる者と定まり　プロメテウスの謀り事に激怒したゼウスは、人間から火とそれに付随するその他諸々を奪い取った　けれど、人間の庇護者は、炉の中に隠していた火を以て、その熱と輝きを取り戻し　それ故に、プロメテウスは大いなる山の頂へと、磔にされたのである。人間では無く秃鷲へ、牛では無く自分自身を差し出す為に　未来に己が座を奪うだろう者の名を告げれば、というゼウスの甘言も退けて　半ば永劫と言える苦痛に身を委ねたのである。

嗚呼プロメテウス　先を見通す者、熟慮する者……

そして彼の罰は、神であり人でもある彼の英雄に寄って開放されるまで延々と、それこそ延々と行われ　歴史は、人間にも与えら

れる事となる罰、プロメテウスの愚鈍な弟と、無垢な、余りに無垢な始祖少女の筐に纏わる物語へと続いて行く……

さて、これから語るのは、そんな我々が見知った物語の続きでは、余り無い。

これは選ばれなかった選択の物語　ゼウスが一層直情的か、裏の裏の裏をかいたが故に、肉と内臓が神のものと、ただの骨が人間のものとなされた宇宙の物語。

我々が馴染みのものとはまるで違う、もう一つの贈り火の物語である

・解き放たれた原子心父

そして彼は火の神の導くままに、新たな自分へと名前を与えた。
アステリオス

それは古き言葉で、『雷の輝き』『星の光』を意味するものであった。

「J・O〃ネルレラク 『未来の Prometheus』 「涙の国から我等の為に」

？

赤と青が入り交じった薄暮れ時の空の下、エル〃ゼノ企都は無数の灯に溢れていた。

時刻機と探知機と点灯夫に寄って次第、次第と電気を通され始める

街路灯や部屋灯、自動車輻の灯光よりも淡く仄かで、昔懐かしい瓦斯灯に似た温かみを感じさせるその灯は、外から見ると小高く盛り上がった丘として捉えられる 『アクロポリス』という由来の

一つがそのものずばりを表している様に 企都の中心にして中央、

天も貫かんばかりに聳え立つ本社楼とそれに連なる摩天楼郡から緩やかな波を成す様に数を増させ、かつて持っていた『民会』の意を置き去りに発展する繁華帯を経て頂点となり、居住区や有機無機両面の製造場等が広がっている郊外になるに連れて、また緩やかにその数を減らして行く。

と、貴方の観劇鏡をちよつと失敬し、焦点を調整して見よう

すると、その灯が、道行く人、人、人の胸中から、或いは人型、非人型の機械の何処より 大抵は胸に当たる部分から 溢れ出ているのが、眼に飛び込んで来るだろう。大きさにして丁度人間の拳程の光源は、音も無く熱も無く、宿主とその周囲を浮かび上がらせている

？

心燈。^{バイア}

それが灯に付けられた名前であつた。

貴方^{バルバロイ}が社外の民で、もしこの言葉に覚えが無いとすれば、こう説明して置こう。

即ちは命の灯火と　　喻えでも何でも無く、それは正にその様なものだつた。

？

かつて　　と言つても、青銅時代を決して超えはしないかつて、今の企業間のもものよりも余程血生臭く、野蛮極まりない戦争が日常茶飯事であつたかつて　　人々は、確とした魂の存在を夢想していた。肢体と死体、者と物、人間と人形　　等など、一見すると同じ様で、しかし明確に違ふそれらの違いを産むものが、きつと何処かにある筈だ。それこそが自己を定義する究極の本質、絶対の真理に置いて違いなく、それを見付け、形として取り出す事が出来れば、我々は腐り行く肉を捨てて永劫となる事が　　黄金時代に共存していた神々の如くなる事が　　出来る筈と、その様に考えていたのである。

かつてはしかし、その実態に關しては何も　　正直な所、今に至つても謎は数限り無くある訳だが　　掴めていない状態だつた。『きつと』『何処かに』ある『筈』と人々が感じ、考えていても、そこでこの話はお終いであり、議題は次へと移り変わったものである。　　転機が訪れたのは比較的最近であり、今から八百年程前の事

だけれど、実はそれ以外の、例えば誰がそれを、どの様にして見付けたのか、なんてものは不明瞭なままとなっている。今では百年二百年なんてそこまで大した時間でも無いが、八百年と言えばちよつ

とした昔であり、そこまでの高齢者は今の所、まだ生存していない（世界第一位の高齢者はニユクレシア社の前社長シェリー・ドレツドと言われており、開示情報を信じるならば、今年で五百十二回目の十七歳になるとの事である。その完成に祝福を）。だからこそ、企業は自分達こそが起源だと言い張って憚らず、合わせて証拠やら証人やらが造られ、実しやかに記述が変更されている訳だから、どれが真実なのか、もとい真実に近いのかなんて誰にも何にも解らない。それは恐らく企業自体にも、だろうが 知識も理論も実在には勝てなければ、八百年前の出来事はたった一言で纏められる。
見付けたつ ユリイカ 重要なのはその一点であり、それ以上でも以下でも無い。

だからこそ人々は、この革新的と言える発見を如何にして生活と社会と、人生と結び付けるかに邁進して来たのであり それはやがて、一つの科学体系へと発展した。

これはかなり初期の段階に置ける実験と観察の 道具も無ければ仮定も用いない類の 結果だが、肉体から解き放たれた靈魂は何の器官を持たぬが故にそれのみでは何も出来ず、何も感じられず、しかも外気に晒される事でその存在は希薄となり、やがては事実上の消滅を迎える事が判明している 肉を持って生まれて来たからか、或いは魂の性質に寄るものか、何にせよそれは器を必要としていたのである。

宜なる哉、人々は肉体を 最早感性や推量の問題では無い、文字通りただの容器と化した肉体を造る技術へと力を注いだ 如何に強靱に、如何に快適な肉体を産み出すにはどうすればいいか、その素材や設計はどの様なものが最適か、と言うより、そもそもこの肉体というのはどんな風に動いているものなのか アンド・シー・オン 云々かんぬん

『衣服が人間を造る』とは良くぞ言ったものだけれど、こうして歴史は、肉体造形の道へと歩み始める その流れの何処かで、魂を密封、保存する為の筐体が形作られ 垣間見える光に寄って、

それは心燈バイアと称されるのが一般的となり　大きく分けて生体ヴィオスに機
体キヤの二種類に分別出来る、心燈バイアを以て完成となる有機無機の器が幾
つも、それこそ腐る程に産み出され　肉体の仕組みが解明されて
行く中、派生する様に、心燈バイアが無くとも動く事が出来る—自動機械
が誕生し　心燈バイアある限り不死である人間と、彼等に付き従う機械
の存在は世の中を、中でも戦場の様子を激変させ　それらを纏め
て自動機構オートマテイクス学へと昇華すれば、有益な成果に投資者達はますます富
裕と力を高めて行き　そうして辿り着いた場所こそが、貴方の眼
の前に広がっている光景である。

？

もう一度観劇鏡おもめを拝借して　エルⅡゼノ社が管理、運営するこ
の企都ボリスは、現在三百余り存在する企都ボリスの内、中の上程度の規模とい
う所だが　エンシオⅡインダストリアル企都ボリスは、一つの大洋を取
り込んだとも、産み出したとも言われているし、クロノウエア企都ボリス
に至っては、嘘か真か、巨大な空間だけでは無く、巨大な時間、現
在、過去、未来すら所有しているという　心燈化バイアした人間の数で
は随一を誇っていた。

その中のまた何割が直系企族であるかは置いておくとしても恐ら
く、心燈バイアの輝きに寄って夜闇が退けられているのは、この企都位ボリスの
ものだ。それは最も重要な要素である魂の受け皿を、機体マキナを、お家
芸とする電気結合構築術エレクトロニクスに寄って量産化するに成功した為であり
縦令身分がどうであれ、幾何かの賃金と、有り余る覚悟と、ただ
一つの靈魂さえあれば、神々の如き不死を　少なくともその片鱗
を味わう事が出来るのである。

青銅にしては、何と良い時代であらうか。

市民達にとっては正に企業様々であり、遍く刻まれた《黄金軌跡エルⅡゼノの
の？》よ永遠に、という所だろう。きつとそうであるに違いない
それを証明する様に、今や陽の光も消え失せたエルⅡゼノ企都ボリスは、

けれど尚も暖かな灯火に寄って照らし出されている。人在ればこそその光であり、光在ればこそその企業である。その姿は、恭しくも美しい。

と、しかし、物事には例外が付き纏うものだ。神々の恩恵には生け贄が、支配階級には従属階級が不可欠である様に。繁華帯の一角、夜の憩いを、快さを求めて揺れ動く灯火が群れの中にあつて、浮き上がる様に暗く黒い塊が、そこには在った。

伝統的な神殿様式を門と構える、五階建ての建造物。だがそれは、見るからに廃れており、周囲の喧騒とはまるで似付かわしくない。窓が割れ壁が抉れ、生活の息吹はまるで無く、風貌はそれこそ古臭いあの墓標というもの。必要と欲求の二点から、殆どの企都^{ボリス}で使われなくなり、一部の企族^{ヘレネス}が殊勝な趣味としている石の筐の様である。

この建造物が元々何であつたのか、何故今もあり続けるのか、知る者は居るまい。そうと欲する者もまた同様に、である。こんな辛気臭い場所に、誰が興味を抱いたりするものか。周りは灯に溢れている、自身もまた灯なら集まる事こそ道理だろう、と。

その様に無視され、見捨てられていたからこそ、それは、企都^{ボリス}に穿たれた穴の様に浮き彫りとなつていて。だからこそ、市民達は誰も気付いては居なかつた。

その眼と鼻の先、そして今この瞬間にも、彼が目覚めようとしていた事に

？

呆然。

それが彼の最初に浮かべた表情であり、そして抱いた感情であつた。

呆然、と彼は薄暗闇を見詰め、見詰め。見詰め続ける。
その脳裏に過る思考もまた呆然であつたけれど、それは意識した

時点で自失した。

はっ　と息を吐く様にして上半身を起き上がらせるや、彼はぐるり周囲を見渡す。

ぼんやりとした灯しか無ければ輪郭しか捉えられなかったが、それでもここが密閉された空間　部屋の中である事は容易に知れた。余り広くは無く、壁があつて床があつて天井があつて扉があつて窓があつて、そこから覗く景色は妙に煌びやかに、また騒がしくそして家具には少なくとも寝具があつて　と並べ立てた後、彼は紛いなりにも辺りを照らしている光が、自分の胸元から出ている事に気が付いた。

思わずそつと手を翳す　引き締まった筋肉を帯びる胸の中央に宿っているのは、穏やかな橙色をした灯であり、肉を、皮を、指を通して尚も、微かな、だが確かな光を放っている　これは一体何だろう、と彼は灯へ視線を落としながら、縦に、横にと、十字を切る様に指でなぞり　なぞろうとした所で、その視界が急に開けた。

かちりぱちりと言う小気味良い音と共に電灯が灯り、灯火は陰り　そうして彼の眼に飛び込んで来たのは、先に見たものと殆ど大差無い。精細部分がはつきりとした、という程度であり、漆喰の剥がれた壁やひび割れた天井に、この部屋が遂げた歳月を感じ取れる。何故か何処にも埃は無く、また良く見ると、寝具のシーツも真新しい。その寝具以外の調度品はというと傾いた棚位しか無く　そこまで来て、彼の視線は彼女のそれと交わった。

大きく透き通った、アメーバ紫水晶の瞳　短く切り揃えられた銀色の少女髪　小柄な体躯　白磁の肌　畳まれた衣服を抱える細い指

皺一つ無いエプロンドレス　等と言い募るよりも端的に可愛らしい、だが何処か違和感を覚えさせる娘が、扉の側に立っている　何が可笑しいかは良く解らない。我知らず片手を唇へ向けながら、じつと見詰めても、そつと目線を外し、全身を然と眺めても　と、そこで彼女の唇が微かに小さく開かれ、

『お目覚めでしたかヴィクター様……それとも起こしてしまわれま

したか？』

鈴に似た声が、その隙間から溢れ出る　それが紡がれるでは無い事を、唇を全く動かさずにその内側から言葉が出ている事を見た彼は、漸く違和感の正体に辿り着いた。

瞬きの無い瞼　自然淘汰とは無縁な色彩　内臓があるには思えない肢体　首や指、を繋いでいる球状の間接と、部位と部位の間に出来た小さな隙間

そして何よりも、彼女の胸には、灯火が無い

『……お加減の程は如何でしょうか？　ヴィクター様』
「……え？」

解つてしまえば明らかに違うというのに、こうして気付くまで気付きもしなかった迂闊さを呪いながら、ぺちりぺちりと指で軽く唇を触っていた彼は、少女の二度目の問い掛けによって、ずっと口を半開きにしていた事、出て来た声が思った以上に低い事、それから『ヴィクター様』というのが、どうやら自分を示している事も理解した。

理解、理解、理解

と、さつきからそればかりであるのもまた同様であれば、

「……ヴィクター……ヴィクター……ヴィクター？」

彼はそう、自分で自分の（らしい）名前を口にして見る　今度の違和感は強固であり、まるで消える気配が無く、何故なのかと考えてヴィクター（らしい）は、自分の頭と心の中が、記憶が、精神が、酷く虚ろで曖昧で、甚だ信用出来ない事をも理解した。
じわりと嫌な汗が滲み出る。

自分のものだというのに、まるでそんな気がしない

『……やはり混乱が起きている様ですね……』

と、そこでどんな表情を浮かべていたものやら、少女（らしい、が厳密にはきつと違う）はヴィクターの内の不安を察してくれた様だ　ツカツカと、妙に鋭く甲高く靴の踵を鳴らして歩み寄りながら、彼女はもう一度その色の薄い唇を微かに開いて、

『貴方の名前はヴィクター、ヴィクター・ナイト様。前企都戦争に
置ける功労者、名うての巨兵像遣い、稀代の撃墜王……だったの
すが戦後、誤って無辜の市民を永殺した罪によって禁籠の刑に処さ
れました……以降十五年間は肉体を得ぬままに心燈の姿で過ごされ、
そして恩赦として特例警邏員に任命されたのです……これこの様に
……』

そう一気に台詞を放り出すや、カツンと踵を揃えて立ち止まり、
彼の眼の前で小首を傾げる お解り頂けましたでしょうか、と、
その鉱石の瞳が語り掛けて来るのだけれど、如何せん出て来る言葉
が片っ端から解らない上に何一つ信じられなければ、応え様も無く、
「ああ……まあ……その、何だ……」

ヴィクターとしてはしどろもどろと返すのが精一杯で、追従から
逃れようと、自然と視線も泳いでしまう訳だけれど その内に彼
の視線は、彼の体をちらと捉えた。

そうして、少女が持って来た衣服を、その視線の先を理解して

「……とりあえず、だ……」

『……何か？』

二度目の迂闊さを味わいながら それは先程よりも何故か確実に
に我が身として感じられ ヴィクターは、尚も小首を傾げたまま
の少女へと視線をやり、直ぐ様逸らしてもう一度送り、誤魔化す様
に片指を振るいながらこう言った。

何故指を当てていたのかと、その単語へと思ひ至るのに、更に数
秒の間を要しつつ、

「……煙草、持っていないかい？ 出来たらその……ああ………ライター
と一緒……」

？

「申し訳ありませんが、当企都は一部地域を覗いて禁煙となりました」

十四年前に、と、そう彼女が無碍に返せば、ヴィクター・ナイトは文字通りの、何とも歯痒い思いをする事になったのだけれど、それもシャワー室に案内されるまでの話。

目覚めてから始めて味わう暖かな水滴　十五年ぶりという事になる訳だが、肉体の方は清潔そのもので、特に浴びる意味を見出せない。その代わり、精神に及ぼす効果は思わず吐息が漏れる程であり、目覚めて、所か、産まれて始めての様に新鮮で快適だ。

そうして魂の垢が洗い流される内に、更に幾つもの事実が呑み込めて行く。

最初に腑に落ちたのは、その肉体について　水滴を拭き拭き、壁面に埋め込まれた全身鏡を覗く事によって、ヴィクターは漸く自分自身の姿を外側から知ったのである。

そこに映っていたのは二十代後半の男性　これが違っていたら大弱りである　だった。背は高過ぎず低過ぎずの中背だが、筋肉はしっかりと付いている。部位によって肌の色合いが白かったり黒かったり、肉付きも何処となく均一を欠いている感があるのは気になる点だが、軽く動かして見た所では、そこまで神経質になる必要はなさそうだ。また、それ以上に気になる顔立ちは、と言うと、こちらは どうして、なかなか整っていて、我乍らちよつと感心してしまふ。やや垂れ気味となった翡翠の瞳、知的に開かれた額の両翼から前髪を垂らす波打つ黒髪、既にして切り揃えられている口と顎を覆う髭、と、付随する部品も彼の美的感覚に合致した構成であり、

「ふむ……」

特に髭、この口髭が何ともいいと、彼は指で弄り、抓りながら、
「悪くないね……」

そう口にする　ちよつとおかしな話ではあるが、ヴィクターはこの姿に確かな満足を覚えていた。勿論美醜の判断は全て自分の感覚頼みだったが、それがどうした。自己満足は重要な事だ、他人の判断を判断するのもまた自分の感覚であれば尚更に、

『何か仰られましたか、ヴィクター様？』

「いいや別に……それで、何処まで説明されたんだっけ、メアリ？」

ナルキッソス

と、そこで曇り硝子越しに声が掛けられれば、彼は自己陶醉の鏡面から我を引き離して、そう語り返す。心地良さの中で落ち着いた為だろう、ヴィクターは自身の精神状態も解り掛けて来ていた。どうやら彼の記憶は、十五年という歳月を経て得た久しぶりの肉体によって、すっかり覚束無くなつてしまつたのだが、完全に消えてしまつたという訳では無いらしい。会話がちゃんと成立出来ているのがその何よりの証拠であり、言われれば、聞かれれば、時間を掛けてでも想い出す事が出来る、らしい。勿論、禁籠されている間の事は流石に解らないし、中には思い出せないものや、確信が得られないものもあつたけれど、全てが忘却の彼方へと消えてはいない。気分としては、手垢だらけで矢鱈と見知つた用語ばかりの辞典を読み解いて行く感じだろうか。そこで必要なのは検索する為の鍵であり、単語であり、或いはその詳細であり、シャワーに打たれている数十分の間、延々とヴィクターは質問をし、解答を得、また質問をと繰り返した。

その様にして一つ、また一つと、彼の精神はこの時代、この世界に対応する。丁度放浪の民が定住の地を見付けて変わつて行く様に、心燈バイアについて、企都ボリスについて、戦争について、と聞かされれば、その中には、この肉体が自前のものである事や、自分が過去に打ち立てた戦績等の喜ばしいものから、その戦争によって家族は既に永眠しており、血縁関係の者。半ば慣習的言い回しだが、多くの企都ボリスがそうしている様に、行為及び機械での生殖が義務化していれば、完全に廃れたとも言い難い。は最早誰も居ない事、自分がその様な憂き目に合う遠因が、殺しの衝動が、事もあるうに酷い酩酊にあつた等という、聞きたくなかつたものであり。そして彼女の名前がメアリと言い、ヴィクターの世話をする為に派遣されて来た侍女且つ、一自動機械である事もそこに含まれていて、

「ふうむ……成程、ね……つまりは人形、と……」

『その通りですヴィクター様。より正確に言えば、エル＝ゼノ・サ

ンドアイズ社共同製、汎隸人型―自動機械、型式番号【？】

“メアリ”がこの個体を示す名称になります』

すっかり人心地付いてシャワー室から出て来たヴィクターに、殆ど完璧と言って良いタイミングでタオルを渡しながらメアリが頷けば、髪を、体を拭きつつに　開き直れば、それこそ何を隠し立てする　彼はしたりと頷き、例えばその関節の隙間を見詰めながら、
「そんな気は薄々していたのさ、ほら、やっぱり見た目とか、さ」
そう言っただけで見るけれど、しかし彼女は首を横にふるふると振るい、
『お言葉ですが、』

「ん？」

『外見的特徴は判断の基準と成り得ません。人間と人形の区分はただ一つです』

「それは？」

『決まっているではありませんか』

と、その白い指を胸元のタイへとやれば、やはり淡々と言葉を吐き出し、

『心燈の有無以外の何物でも。我々を動かすのはただ算譜機械の働きだけです』

「……本当かねえ？」

『常識かと思われませんが』

「生憎……と、そういう輩とは、十五年間音沙汰無かったものでね。ありがとう」

『では早々にお付き合いを再開するべきです、貴方の為に。どういたしまして』

一通り吹き終えたヴィクターは、メアリに手伝わねがらに、衣服を着込んで行く　その心中に、一抹の疑問を浮かべながら
本当だろうか、と、糊の効いた白シャツを羽織りつつ、彼は彼女の胸元、心燈の灯が見えない胸元へと視線を飛ばす。封ぜられる事となった当時をまだちゃんと思ひ出せていない所為か、こうして話している、彼女が一自動機械とはとても見えない。或いはそうやっ

て思い込ませる存在こそが――自動機械の機械たる所以なのかもしれないが、しかし比較対象は何も無い　少なくとも今ここに、この場所には。だが、無論それも、部屋の外となれば、話は全く異なってくる訳で、

「まあいいさ……で……俺はこれから誰と会えば良かったかな？」
『フランク・レイニー社長です……目覚められたら、直ぐにでも、と』

「直ぐにでも……と、何をさせるつもりなのかね、そいつは一体」
『その件に尽きましては、直々に説明をするそうです……悪い様には致しますまい』

「だいいいが、ねえ」

そう言つて居間へ向かうヴィクターの両腕に、後を追うメアリが黒の上衣を通していけば、彼はその唇を軽く歪める　フランク・レイニーという名に大した覚えは無いけれど、しかしそこには何とも言えないききな臭さを感じられる　聞けば『永殺^{テロス}』、つまり心燈^{バイア}の直接的な破壊は、永遠を生きる相手から永遠に機会を奪つてしまふ大罪であるのだという。そして永遠の前に、如何なる理由も意味をなさず　ヴィクターの場合はそれこそ余り関係無いが　故にその罰も重く、大抵は肉体（そこには物質的所有物一切という意味も込められている）剥奪の上での無期限禁固、禁籠の刑に処され……それでおしまいである。

永遠を奪つた者は永遠を以て贖いを　心燈^{バイア}に関する諸制度がエール^ルゼノで採決されたのは、その成立当時、つまり七百年前まで遡れるが、当時から現在までに、禁籠を解かれた者は皆無であるという　少なくとも、この企都^{ボリス}の記録上には、誰一人存在していない。そしてその記録を今破る者こそがヴィクター・ナイトなのだ、とすれば、怪しいと思わない方がどうかしている。しかもこうして部屋　覚醒の都合だか何だかと、ご丁寧に当時暮らしていたという安部屋まで再現した　を与え、侍女　人間か人形かの口論は置いておくとしても、侍女である事には間違いない　まで付けたな

らば、尚更にである。

ただ……そうは言っても、逢って見ない事にはどうしようも無いのも解っている。

差し出された鏡を前にして身嗜みを、主にその口髭の状態を確認したヴィクターは、そう顔を上げるや、じつと佇むメアリを見、それから影と成す玄関へと視線をやった。

吉と出るか、凶と出るか、精精、神にでも祈っておこう、等と思いながら　如何せん、祈るべき神の名は思い出せなかったが、まあ名無しでも構うまい。解らない事はまだ山程残っている、気がするのだ　真に重要であれば、自ずと解って来るだろう

？

その様にして一人と一機は、部屋の外へと繰り出した。中の状態がまるで嘘の様に荒れ果てた廊下　『居住の為の最小限の補修はしておりますから、ご安心を。特殊警邏員としては、この物件が最適だったのです』とはメアリの弁で　を抜ければ昇降機^{エレベータ}前へと辿り着き、かちりかちりと、幾度押した所で一向に反応を示さないそれに対して、ある種の眷属としては些か乱暴な喝を彼女が入れてやれば、漸く開かれた狭く古臭い箱の中へとどうにか体を押し込ませ降りているのか落ちているのか区別の付かない時間を味わってから、埃と瓦礫位しか無いホールを抜けると、その先に広がるエルⅡゼノの光景に、ヴィクター・ナイトは思わず嘆息を漏らした。

灯　彼の胸にあるのと同じ心燈^{パイア}の灯が、そこかしこに溢れている

成程、窓から見えていたのはこれだったのか、と、ヴィクターは辺りを見渡す。

先程の説明から察して然るべきだったが、しかし聞くを見るでは段違い^{アコラ}だった。

繁華^{アコラ}帯、と言ったか、およそあらゆる娯楽に溢れたその通り、地

帯の賑わいは、夜も勢力を増しているというのに向に衰える気配を見せず、寧ろ拮抗している風にも見える。それは心燈バイアの灯もまた同様であり、看板、標識、と至る所に取り付けられた電飾ネオンの眼に突き刺さる様な輝きの中でも、穏やかな橙色の光はちゃんと判別する事が出来た。

要するに、灯の数だけ、今ここに人々が生きているという訳だ。
闇にも負けず、雷にも負けず

『……如何されましたか？ ヴィクター様』

そんな風に、意外な程の感慨に浸っていたヴィクターは、既にして距離を隔てていたメアリの声で我に帰ると同時に、周囲の視線にも気が付いた。住居とは名ばかり、中身ばかりの廃墟から、愛らしい侍女を連れていきなり出て来た男が、道の真中で突っ立っていれば、訝しがられても当然か、と、彼は苦味を込めた微笑を浮かべると、やあやあと愛想良く腕を振るって挨拶する 無論反応等ある筈が無ければ、そそくさと視線は退き、止まっていた歩みは動き出し、そしてメアリへと至る道が開かれた。

彼女の元に歩み寄って見ると、その側に一台の黒い自動車輛オートカートが止まっている。車道を直走る他の車輛と比べると、筐体然とした形態こそ大差は無いが、その色艶は如何にも高級そうである。黒の車体に刻まれた《黄金軌跡エル・ゼノの社章の？》がその雰囲気有助長すれば、一瞬気後れしてしまっただが、侍女が扉を開けて待っている以上、乗る以外の選択肢等ある訳も無い。

そこでヴィクターは中へと入り、メアリもその後が続いた。そして、扉が閉まるのと鍵が掛かるのがほぼ同時に行われ、車輛が走り始めると、その時になって彼は、運転席に誰も座っていない事を知った。ご丁寧にも運転装置の類は全てそのままの形で残され、傍目には見えない人間がそれを動かし、車輛を操作している風にしか思えない。

無論、そうでは無い事をヴィクターは知っていた為、したり顔でメアリを見て、

「これもまた一自動機械かい……外も豪勢なら、中も豪勢だな」

『はい、残念ながら違います、ヴィクター様』

けれど向き返すまでも無くそれを否定すれば、彼女は視線でハンドルの中央を示す。

吊られて見やれば、そこ灯っている輝きは紛れ様も無く心燈バイアのものであり 右へ左へ、揺れも無く車体を進ませる度に、その存在を示すが如く、微かだが明滅を繰り返している。

『豪勢でしたら、算譜機械コンピュータなんて搭載致しません。彼はちゃんと雇われた人間です』

「ちゃんとした、人間……ね？」

そんな自動車オートカー輻を眺めつつ、ヴィクターがそう漏らすと、メアリの首が静かに回り、

「一応言つて置きますと、本社付きの運転手ですから、普段の格好は別にありますよ……それで無い人々も大勢ですが。どうやら貴方は、まだ器を気にされておられる様子で」

「ああ……いや……ええと、つまり良く解らん自分でも」

合わせる様にして彼もぐるり向きを変えると、窓の外へと視線を投げる。

道すがら、窓越しに見えるのは、彼女の言葉を反映する様なものであり、心燈バイアの灯を宿すのは、何も人の形、人の肉をした者ばかりでは無い 心燈化バイアに合わせた改造を元の肉体に施す程の資金を持つていない者達がやむを得ず、或いは単純な職業上の都合か、もつと簡潔に興味趣向に寄つて、機械の身へと宿る事が、最早この企都ボリスの常識となつて居るのはメアリから聞かされていたけれど、だからと言って納得しているか、というとなんな事は無い 丁度、隣の少女に感じているのと、同じ様なものだ。外面と内面の相違というのは、どうにもこうにも覚束無さを加速させてくれる。

これはやがて解消される違和感なのだろうか そう思いながらヴィクターが窓の外へ視線をやっていると、徐々に風景が変わり始めた。喧騒は途切れがちとなり、人気も減つて、電灯も灯火も勢い

を無くせば、建物は樹木の様に夜空へ向けて生えて行く摩天楼郡に
変貌し 中でも一際巨大な建造物が目の前に来ると、自動車輦は
そこで停まった。ビルディング
オートカート

そして触れてもいないのに扉が開けば、ヴィクターは外に出、そ
の建物を見上げる。

夜天に影を投げ打つ様に、灯も殆ど無く、黒々と聳え立っている
石と鉄の巨塔。

文字通りの企都ボリスの中枢 管理、運営の要にして、地理的意味で

の中心であり中央。

エルゼノ本社楼アクロス

？

『お付きしました こちらです。報告して参りますので少々お待ち』

と、何時の間にか外に出ていたメアリが正門へ向けて歩き出せば、
ヴィクター・ナイトもまた顔を戻し、その背中を追って行く。既に
して大方の業務は終わっているのか僅か数人の、入るでは無く出る
方の者達とすれ違いながら、一人と一機は緩やかに広がる階段を登
り、調和と均衡を第一と並び立つ円柱と円柱の間を通って、本社楼
アクロス
が中に脚を運ぶ。

そこでヴィクターを出迎えたのは広々と ただし彼等と見目麗
しい受付……自動受付嬢以外に誰も居なければ、今は寒々と、とし
た方が相応しい様に思われる した白亜のロビーホールであり、
人々を見守る様に鎮座している巨大な石像であった。

それは豊かな巻き毛の髪と、負けず劣らず豊富な髭を蓄えた男の
姿を象っていて、年齢はかなり上と予想出来るが、首から下は筋肉
隆々としており、まるで衰えを見せていない 一見では気になら
ない程度に慎ましく垂れ下がった、だが注意して見れば明らかに雄
々しいと解る一物もまた同様ならば、ヴィクターは思わず唇を歪め、

反射的に視線を上に向けた所で、男が高々と掲げた手に、剣の様なものを握っている事に気が付いた　いや、剣では無い。おやと目を凝らして良く見ると、その鋭角に折れ曲がった代物は、どうやら雷光を意匠化したものであるらしい。男の身体同様にそれは大理石の白、ロビーホールの白をしていたけれど、力一杯握り込まれた拳と、その余りの鋭さによって、光り輝いている様に錯覚出来る
まるで眼を眩まさんばかりの輝きを

と、見ている間に報告は終わった様で、自動受付嬢と直立不動の会話を行っていたメアリがヴィクターの名を呼べば、彼は石像から目を離し、彼女の方へと小走りで駆け寄って、

「なあ……あの像は一体何なんだい？」

『あれはエル・ゼノの守護企神……電気的奇跡乃御業の始祖とされる無銘の神です』

「ふうん……また随分御立派な肉体だ事で、羨ましいねえ」

『ええ、実に立派です。実際の所、あれは贗物で、原形はかつての戦争の際、海に没したと伝え聞いておりますが、それでも、当代一の造型師の手があればこそ……ですね』

「俺もあんな風になれると思うかね？　メアリ」

『それはこれからの活躍と、その為の努力に掛かっている事でしょ
う、ヴィクター様』

「いやはや全く……だいいが、ねえ」

そんな会話を繰り広げながら一人と一機は隣り合って進み、奥に並ぶ昇降機の一つに乗り込んだ　合わせ鏡が無限の如き空間を垣間見せる中、目眩のする程の数字が刻まれた端末をメアリが操作すれば、筐体は音も無く揺れも無く、ただ奇妙な浮遊感だけを与えながら、上階目指して登り始める　今度のそれは数える気も暇も与えなければ、扉上に表示されている階数を指数的に上昇させ　気が付くと、数字は文字へと変わっていた。

即ち【最上階】と　そしてヴィクターの前で扉が開くと、傷一つ、汚れ一つ無く異様に磨き上げられて鏡面と化した、青いタイ

ル貼りの空間が目映る。

床も天井も壁も、隙間無くびっしりとタイルで覆われており、その間々、天地を繋ぐ様にして装飾された円柱が左右に並び立ち、扉から部屋の奥、数段上がった先の書斎机まで道のりに続いていると、灯煌かす夜景を背にして、一人の男が立っていた。

見た目は妙に若々しく、精力に溢れた二十代後半の人物である

ホーブタイヤ

黄金色の髪を後ろに撫で付け、青金剛の瞳は澄み渡り、体付きは

バイア

がっしりと純白の紳士服で覆われ、その所為で心燈の輝きもいや増して見える　けれど同時に、何処と無く老いを感じさせる人物でもあった。余りに堂々とした佇まいは年不相応に見えだし、それに

その表情、穏やかで朗らかな微笑は、確かに穏やかで朗らかなものには間違い無いけれど、そう思い込ませる様に作られているのが感じられ　と、昇降機エレベータから一步踏み出し、ふむと唇へ指を当てつつ

ヴィクターが見て取っていると、その口元がそつと開かれて、

「やあメアリ、わざわざ連れて来て貰ってご苦労だったね。そしてヴィクター・ナイト……今世では始めましてかな。気分はどうだい、十五年ぶりのお目覚めは？」

そう語り掛けてくる調子は如何にも活力に満ちた、如何にも親しげなものであり、ヴィクターは意図して眉を潜めつつ口元を釣り上げながら、その場で頭を下げたままのメア리를尻目に、遠慮会釈も無くつかりつかりと歩み寄って、

「良くも無く悪くも無く、という所かねえ？　何分久方ぶりのお目覚めのせいで、脳味噌がどうもしゃっきりしてくれなくて、さ……色々と判断に困っている訳だが、」

間近まで来てから値踏みする様に上へ、下へとその眼を動かし、

「あんたがフランク・レイニー？　この企都ボリスの、現社長？」

「嗚呼そうとも。正確に言うならば、三代目社長、という所だがね」

「成程ね……よろしく社長」

「こちらこそよろしくヴィクター」

そうして二つの右手が差し出されれば、がっちりと握られ、

「で、まあということ……結構長い事社長をやってる訳だ」

「そういう事になるな」

「その割には随分と若作りなご様子で」

その手が離れるのと、苦笑いが浮かぶのが同時であれば、フランクは鷹揚に頷き、

「『若作り』という言葉は、^{ヘレネス}長寿番付上位の間では半ば死語、もとい別の意味合いを含み出している……ただ、どちらであっても、そうだと云えるかな。普段はもう少しシツクな感じの肉体にしているんだが、君に合わせようと思ってね、ヴィクター」

「俺の為に？」

「ああそうとも君の為さ……正確には、君のこれからの働きの為に……」

例の微笑みをますます深めると、彼は手をヴィクターの肩に乗せ、そうして讃える様に叩いて見せる。その態度はこの企業の、この街都の長としては相応しく自信に満ちたものには違いないけれど、何処か馴れ馴れしく、癪に障る態度でもあり、

「これからの働き、ね……いい加減、教えてくれる？俺は何をしただいいのかと」

「ああ、ああ、いいとも、勿論教えよう……こちらへ来たまえ」

少々うんざりした調子でヴィクターは返すが、フランクの方はというと、特に気にした風でも無く、親愛を示す様にその肩を掴みながら、窓辺へ向けて歩き出して、

「知つての通り、かどうかは知らないが、我々企業はそれぞれの都市を管理、運営している……その一切合財を、だ。衣食住に各種娯楽、そして勿論心燈^{パイア}と器に至るまで、我々が手を付けていないものは、^{ボリス}企都の中には存在しない……それは他の企業も同じだから、時として武力を介した、往々にして武力を介さない抗争が勃発する訳だけれど、それはそれ、と、お互いに納得付くの想定済みなのだから、何の問題も無い、」

表向きは、と片目を瞬きさせつつ付け足すと、くるり共に振り返

つてから片手で懷を漁り、中から長細い端末を取り出した。かちりかちりと数字の刻まれた筐体を弄りつつ、その先端を今来た空間へと向ければ、天井と床とで向かい合わせとなった一対のタイルがにわかには発光し、間の中空へと彼の社長と同じ色に青褪めた、片隅に《黄金軌跡の？》エルゼノの社章を宿す映像が投影され　ヴィクターははっと息を飲んだ。

「だからこそ、その枠から外れた相手には手を焼かされているのだよ。群れから外れた独り者には……何を考えているのか、まるでさっぱり解らないから、ね」

そう言つてフランクが端末を操作すれば、映像は次から次と変わつて行くけれど、映し出されている対象自体は変わらない　そこに居たのは人間であつた。

人、人、人

一枚一枚別人であり、その年齢も性別も服装も背景もまるでバラバラで脈絡が無いけれど、肢体の、いや死体の散らばり具合、内臓のぶちまけ具合に、苦悶の表情は共通していて　何よりも、彼等全員の胸には、心燈パイアの輝きが無かった。剥き出しとなった容器は卵の様に碎け散り、その中身は虚空と入れ替わってしまったている。

即ちそれは、何も無し、と……

「我々はこの大罪を犯した……失礼、犯しているものを、《禿鷹》と呼んでいる。余りに神出鬼没で、余りに見境が無く、余りに正体不明で、そして余りに残酷なものだから……ね」

そう眉を潜めて　だが、やはり微笑は崩さぬままに　フランクが映像を切ると、ヴィクターはそちらの方を見るとも無くに腕を組みながら、唇をそつと開けて、

「……それで、その猛禽を俺は一体どうしたらいいんだい？」

「勿論捕まえて欲しいのさ。反雇用者バルバロイだか何か知らないが、この様な非道を我が企都ポリスで許す訳には行かないからね……条件は問わんよ、五体がちよつと満足して無くとも構わないし、この際、外見だけでも結構だ……出来ればそんな酷い事はしたく無いが、やむを得ん。」

最初の被害者が出てから数ヶ月余り、日増しに犠牲者が増えるならば警邏の数もまた増える一方だけれど、まるで成果が無いのだから、非情の行為も取らねばさ」

「そこで俺にお呼びが掛かった、と」

「嗚呼そうさヴィクター。どうだい、やってくれるかね？」

「……出来るものかねえ、門外漢だと思うんだが」

「嗚呼、何、その件ならば、何も心配は要らないよ」

「と、言うത്？」

と、そこでフランクがヴィクターの方へ向き直れば、ますますその笑みを強めて、

「我々の選別基準はただ心燈ハイルであり、心燈ハイルの判別基準は行動にのみ基づく。君の企都ボリスに対する働きはただ一点を除いて実に申し分無く、その一点の為に機会是与えられて然るべき……それに、君の体は改造済みだよ、取っ組み合いになっても問題無いさ」

「……何だって？」

唐突に告げられた言葉に、ヴィクターはフランクの方へ振り向いた。改造？ と、表情を強ばらせながらに見詰めれば、おや、と意外そうな笑みが浮かび上がって、

「聞いていなかったのかね？ ヴィクター……改造だよ改造。君の心燈ハイルが胸中に収まる前に、我々はその肉体を相当弄らせて貰ったんだ。詳細はやがて嫌でも解って来るだろうが、特例警邏の為の特例仕様だ、きつと気に入ってくれる筈だがね」

「何を言って……勝手な事をしてくれるな？ これは俺の体だぜ」

「それは違うな、ヴィクター・ナイト」

そんな悪びれもしない姿にヴィクターは、直立不動の姿勢を維持しているメアリを視界の端で捉えつつフランクを睨み付けたけれど、彼はまるで意に介さない。

「忘れていかもしれないが、君もまた大罪を犯した事には違いなく、物質的なものは全て没収されている。つまり、その体は我々のものだ、少なくともこの一件が終わるまではね……それが恩赦の

条件であり、器は達成の為の道具に過ぎないのさ」

「……では聞くがね、俺がもし首を縦に振らなかつたら、どうするつもりなんだい」

それでも尚、視線鋭く注いでいれば、フランクは、いやいやと首を横に振るい、

「その時はその時さ、君はまた首も縦に振られない姿へ戻るだけ、また何時かきつと訪れるだろう次の機会を待つて永遠の闇の中で生きるだけ、と、まあそうは言っても、解っているよ、我々は……君が拒みはしないという事を」

「何故さ？ 案外簡単に断るかもしれないぜ？」

「理由かね？ 嗚呼いいとも教えよう、」

そこでフランクが顔を上げると、彼は今までに無い程に親密な笑みを顔面に称えて、

「心燈だ、心燈だよヴィクター……それは命の灯火であるならば、魂の昂ぶりによって燃え上がる……気付いてないのかい？ 今、君の心燈がどの様な状態であるのかを」

と、言われてヴィクターは、はつとする様に手と眼を胸元へと向けたけれど、そこに宿る輝きは、彼がそれを始めて見た時から一寸足りとも変わっておらず くつくつと笑い声が耳に飛び込んで来るならば、慄然とした調子で顔を上げる。その様子を愉快そうに眺めていたフランクは、「いや悪かったね」と片手振るいながらにこう告げた。

「だが想う所は間違いなく、と……期待しているよ？ 我等の英雄」

？

そうして、そこで会合はお開きとなり、ヴィクター・ナイトはメアリと共に家路を辿る 後に残るのは胸糞の悪さばかりであり、その家も帰る身もまた胸糞悪さを与えくれた輩から貰い受けた性格には借り受けた、という所か ものではあったが、兎にも角

にも己を主とする車は走り、未だ灯で満ちた夜の街を駆けて行く

「なあメアリ……何で改造について言わなかった？」

「言つまでも無い事と……そも、心燈化^{バイブ}が最も大きな身体の改造なのです。今更多少の変更を加えられたからと言って、何を気にする必要があるのでしょいか」

「まあ……理屈では間違つてない、ね」

「……理屈以外の、一体何が存在するというのですか？ ヴィクター様」

「それは……その、ええい、何だ畜生、俺も良く解らないんだつて」
『器に対する過度の重要視は問題です……早々に改善を行うべきでしょう』

「……」

そんなメアリの言葉に、ヴィクターは顔を顰めた　そういう問題では無いと思うのだが、如何せんこの頭は役に立たず、ろくな言葉も紡ぎださなければ、彼はむつつりと押し黙って、食い入る様に見詰めて来る紫の視線から逃れようと、外を見た。

そこにあるのは、相変わらずの地上の星々だが、今はもう一つが鼻に付く。

至る所、至る物へと刻まれた、大小様々な《エル＝ゼノの社章黄金軌跡の？》

それは、それこそはフランク・レイニーの御印であり、ちらと目に入るだけでも、彼の顔が浮かんで来る　魅力の仮面を貼り付けた、この都の王の御尊顔……

ヴィクターはぎゅつと胸元を掴んだ。

自分が一体何に苛立つているのかも良く解らなければ、未だ足元も覚束ず、目覚めの半日としては先行き不安という所ではあったけれど　一つだけ、ほんの一つだけ揺るぎ無い事が存在すれば、それを噛み締める様に瞳を瞑った。

掻き回される様に現れては消えて行く、無数の顔

散り散りとなった頭蓋の内で、それはさながら星座の様に浮かんでいたのだった。

?

・文化英雄は仮面が好き

自由か死か、それは往々にして重要な問題である。

己がままに生きられぬと知った時、勇者であれば、後者を選ぶ事だろう。

けれど、助けを呼ぶ命は、その問題に解答を、行動を与えてくれる。

躊躇は無かった。

天高く端末を掲げると、彼は勢い良くその起動鍵スイッチを押したのである。

「J・O・ネルレラク『未来のプロメテウス』「帰って来た虚空の恐竜」

？

そしてヴィクター・ナイトは、夢を見た……様な気がした。

そこに確信が持てないのは、夢が余りに膨大な心的情景の塊として眠りの中に押し寄せて来たからで、一つ一つなんてろくに覚えていなければ、しかしそれはまるで現実の様に捉えられ　ドリーム・オピウム企都ボリスが提唱している様に　十五年ぶりの覚醒による雑多な情報を、有機的算譜機械コンピュータである頭脳が処理しようとしているのか、昨日実際に見た者、物が大挙して現れたのが、その印象を加速してくれる。

例を上げて行けば、夢に出て来たのは摩天楼郡ビルディングであり、心燈バイアであり、電灯マスコであり、自動車輜オートカトであり、シャワーヘッドであり、守護企神オートマであり、自動受付嬢オートマであり、青タイルであり、自動機械であり、フランク・レイニーであり、メアリであり

それらがどの様な風だったか、自分はどうしたのか、なんて事は殆ど覚えていない。ただ、そういうものがあつたと、消し炭の様に

記憶の片隅に残っているだけである。

と、しかし一つ、たった一つ、鮮明に覚えている光景があった。

それはヴィクターが目覚めの半日の間に見聞きしたものでは無かった。何が想像を喚起させたかは明らかだが、それは荒野の風景だった。何も無い、何も居ない、岩と砂ばかりが続いて行く地平に、どんよりとした雲が立ち込め、黄ばんだ色合いで覆われている空。と、そんな天と地の間に何時の間にこそ現れたのが、彼の猛禽であった。

文字通りの一羽の禿鷹。造形自体はそれこそ何の変哲も無い鳥に過ぎなかったけれど、その縮尺はちよつとばかり桁が外れており、身の丈は大の男を軽く超えている。翼を畳み、岩の上に鉤爪を降ろし、背を曲げていてもそう見えるのだから、これが空を飛んでいたらどうなる事やら、という心配はしかし当分する必要は無さそうである。鷹は今、目の前の餌を貪る事に集中していた。彼が朝餉なのか昼餉なのか夕餉なのかは定かでは無かったけれど、その鋭い嘴に啄まれ、チュルチュルと腸をほじくり出されている無残な屍が自分自身である事を。外見的特徴の共通点は一切無いのに。ヴィクターは何故か知らないが知っていて、と、その時、ごろりと死体がこちらを向けば、光無き濃褐色の瞳が翡翠の瞳を覗き込み、そこで彼はかつと瞼を開け、がばりと上半身を起き上がらせたという訳である。

今のは夢か現か幻か。そう汗まみれになった胸元を押さえれば、心燈バイアはそのままに、心臓は高々と脈打っていて、ヴィクターは吐息が荒くなっているのを感じるが、そこで小気味良い音と共にカーテンが開かれ見ると、淡い光を背にメアリが立っていて、

『お早う御座います、ヴィクター様……朝食の準備が整いました』

？

この誘いを、ヴィクター・ナイトは素直に受けた。定かで無い夢は定かで無いまま、薄れ行くままに任せて。汗ばむ肌が気に触

れば、先に冷たい水滴を全身に浴び、汚れと共に眠りの風景もさっぱりと洗い流し、それから食卓へと席に付いた。そこには既に朝食が並べられていて、朝餉、と、彼のどうもまだしっくりしない脳は、最後の一片を揺り起こしかねるが、それを抑えて、ヴィクターは食事を開始し

「……なあメアリ、これは何だ？」

半ばまで皿を片付けた所で、思わずそう口にした。

「……お口に合わなかったでしょうか？」

呼ばれてメアリは顔を出し、食べ掛けの食器をぐるり見渡してからヴィクターへとその視線を向けるが、彼はいやいやとその首を横に振るう。これまた十五年ぶりとなる朝食、もとい食事は、お口に合わない所か、実に美味なものだった。パンにサラダに肉にチーズに、と、単純で素朴な献立ではあったけれど、それだけに単体の味わいが良く解つて、だからこそ些細な、だが確かな違和が嫌でも感じられてしまう。

何と言うべきか、どれもこれも正しくその食品なのだ。パンはパンであり、味も見た目も感触も匂いも何もかも、パン以外の何物でも無い。だがしかし、何か、何か本質的な所で、それはパンでは無い別の物に思えて仕方が無いのである。まるで得体の知れない何物かが、必死にパンという存在そのものを騙っている様な。その感慨は、サラダも肉もチーズも同様であれば、喉に刺さった魚の小骨の様にどうしても気になってしまい、一向に腑に落ちる気配を見せない。傍らに置かれたオレンジジュースで洗い流そうとしても、それすら違うと感じてしまうのだから、疑問を呈するのも致し方無く、

『それはまあ……厳密に言えば、全て合成食材な訳ですからね』

そうしてそれはメアリの一言、たった一言によって、物の見事に解決される。

「合成食材い？」

その耳に馴染まない単語に、ヴィクターが片眉を釣り上げつつそ

う唸ると、彼女は、はい、と首肯してから、最早馴染みと化した憚然たる表情を浮かべて、

『非合成食材の栄養価なんてたかが知れておりますし、手が入れられていない分、危険ですから。無論の事、そのままの形状では食欲が削がれるというのは、重々承知しております故、少々手の込んだ形質で出しましたが……いけなかつたでしょうか？』

「いけないも何も……ああ……まあ、いいんだが、さあ……」

ヴィクターも顔を顰めてからに不満を述べようとしたがしかし、途中でお茶を濁すに留めた。基盤が、土台が確固としたもので無ければ、後が続かない、なんてのも、もう大分お約束であり、彼はフォークで串刺しとした肉の一切れをじっと眺めながら、

「……故郷のまともな料理が恋しくなるね、本当に……」

そう零したのだが、ふと見れば、メアリの表情はますます怪訝なものになっていて、

『……お言葉ですがヴィクター様、貴方の故郷はここエル・ゼノであり、そしてエル・ゼノは、百年余り前から、流通している食材のほぼ全てが合成食材となっております……資料に寄ると、貴方の実年齢は肉体相応との事ですし、十五年を足しても百年には届きませんまい。企都戦争にて外国へ行つたというならば、非合成食材が主流な企都は存在せず……社外の民とは接触が禁止されている筈で、また飯に食していれば、肉体の方に何らかの変調が発生すると推測されます……勘違い、では無いでしょうか？』

「……そう、なのかねえ？」

そこまで一気に捲し立てられれば、今度はヴィクターが首を傾げる番だった。

故郷、故郷、故郷、と、フォークを回しつつ肉切れをじっと見詰める。

冷静に思い直せば、何故そんな言葉が出て来たのか、自分でも良く解らない。あの夢と似た様なものなのだろうか、合成食材の味に対して体が勝手に反応して？ もしくは何処かで口にした事がある

るのだろうか　だが何にせよ、恐らくここでの食事とはこういうもののだから、早々に慣れてしまう必要がある、と、彼はひくひくと鼻をひく付かせてから、そつとフォークを引き寄せ、肉を口の中へと放り込んだ。

広がる味わいは、相も変わらずの肉であり、また肉でないという代物であつた。

？

その様にして食事は終わり、締めとして出された珈琲を啜りながら　細かく刻まれた粉末が底に沈殿するのを待つて上澄みを飲む方式だが、それも珈琲であつて珈琲で無い味だ　ヴィクター・ナイトが一息付いていると、メアリが側へと近付いて来て、

『それではヴィクター様、先にこれをお渡しして置きましょう。現在の貴方に合わせて作りました特注品です……気に入って頂けるかと思いますが』

銀に輝く小さな筐体スリッケースを持ち出すと、彼の眼前で施錠を外し、ぱかりと開けた　中に収められていたのは、艶消しされた黒い樹脂で覆われた機械であり、その全貌は銃把だけの細長く角張った拳銃に見えた。右手で握り込んだ時の内側に【¹・²・³・⁴】
【⁴・¹】……と打鍵キが並び、切り取られた銃身の付け根には、紅く澄んだ水晶レンズ体が埋め込まれている。引鉄は丸く輪になっていて、人差し指を収めるのに具合がいい。

そして握り手の底には、例によつて《エル・ゼノの社章黄金軌跡の？》が刻まれている。

「……何だっけ、これ？」

良く解らないけれど興味深いという様子で、ヴィクターはしげしげと見詰めてから、それをそつと手に取った。ピリリという一瞬だが奇妙な感覚を掌に受けながら、彼はそれを握った。そういえばフランク・レイニーも似た様な物を弄っていたか、と、上から下から

全身を眺める。まだ真新しく、傷一つ無い端末は、予想よりも幾分重かったけれど、大きさの方は測った様にぴったりであり、まるで最初から備わっていたかの様に、彼の右手へと収まり　と、そこでメアリが頷くと、彼女はそつと唇を開いて、

『多目的使役携帯端末・第四型です。企都で生きるなら誰もが、何かしらの型を所持している必需品であり、その名前通り使用範囲は多岐に渡ります。最も基本的な機能としては音声通信がありますが、他にも身分証明、代金支払、各種機械操作、等などが、付属部品無しに、体内電流だけで実行可能になっております』

「……そこまで付ける必要があるのか、と、ちなみに失くしたららどうなるんだい」

淡々と放たれる説明を、くるりくるり端末廻しに励みながら聞いていたヴィクターはそう唇を歪ませたけれど、メアリの方はあくまでも諭す様に言葉を続けて、

『紛失、破損時は一応再発行が可能です、金銭的にも社会的にも命取りとなるでしょう。端末が無ければ何も出来ず、そんなものを失くした人間の信用は如何ばかりか』

「そりやまた……機能を分散させた方が余程安全だと思うが、ねえ」
『利便の為です……それに、既に同じものを貴方がたは抱いているではありませんか』

「嗚呼、そうだった」

ヴィクターは、ぎゅ、つと把手を掴みながらに、もう片方の手で胸元に触れた。窓辺から差し込む光に寄ってその灯りは薄れて見えたが、しかし確かにある事は解る。

思えばこれも同じ訳だ、一度破壊されてしまったらそこでお終いという意味で　そんな何とも言えない苦い感慨が湧き出るや、彼は微笑にその苦味を加え、ポォンポォンと適当に親指で【¹⁰³？】と打刻し、カチと決定を示す引鉄を引いた　その瞬間、電氣的振動と違和が、掌から五指の先に掛けてピリリと伝わり　赤い閃光が水晶体から溢れ出ると、大気を焦がす音と共に弾丸となって射出

され、それは壁に当たり、見事に砕き、部屋と廊下とを繋ぐ新たな出入口を、大穴を拵えてから雲散する。

パラパラと残骸が、粉塵が穴の縁から零れ落ちる中、ヴィクターは背筋に生暖かい水滴が伝うのを覚えつつに、薄ら笑いを浮かべながらメアリの方を見た。

彼女は溜息を漏らす様な表情を眼と眉で作ってから、その色の薄い唇を開いて曰く、

『光弾の出力調整には末尾に追加譜号コードをお願い致します、ヴィクター様……』

？

ともあれ活力も装備も万端と相成れば、一人と一機は昼日中の都市へと繰り出す。

今回の道連れに先の自動車オートカートは無い　この目的の一つはエルⅡゼノ企都ボリスの空気を味わい、その土地勘を取り戻す事であり、それに必要なのは何よりも体感だった。心燈バイアという存在になった人間が世界を感じるのに器へと収まらなければいけない様に、ヴィクター・ナイトは、自前の眼で、耳で、鼻で都市を感じながら、混凝土コンクリートの道を己が脚で歩んで行く。

流れ遅い雲に覆われつつも、その隙間より光降り注がせる空の元で、繁華帯アゴラは夜間よりも人気少なく、穏やかな様子を見せていた

電飾ネオンに彩られた喧騒が、早々続いても困りものだろうが　とは言え、一応の『市場』であれば、賑わいはそれなりだ。夜に華が咲き誇れば、昼には果実が、枝葉があり、刹那的快樂よりも持続的充足を得るべき代物が、生活と嗜み程度の嗜好の品が、そこかしこの店に並んでいる。集まる買い手の何処かには携帯端末モバイルが、電気仕掛けの小筐が握られ備わっていて、売り手もまた同様なら、ピ、カチリ、ピ、カチリ、と電気音響かせながらの、盛んな商売が行われている。

その半分は人間　人間の素材と形態をしていたけれど、残りの半分はそうでは無い。肉と金属の混合も居れば、完全に機械であるものも居るし、その姿形も様々だ。元がそうなら扱いも楽なのか、人型が多く見られたけれど、非人型だつて少なからずいる　縮小^{ビルディング}化した摩天楼郡を思わす車輪付き筐型、それを土台と四本、八本と脚を生やした多脚型がその主流か。また人型と言った所で、完全に完璧に、人の輪郭をしている者は稀であり、重心や骨格が歪んでいたり、何れかの部位が妙に拡張されていたり、首から下はまともでも、頭部だけ、顔面だけ一風変わった造形になっているなんて者も居る　目深に被った中折れ帽の下で、真つ赤な一つ目を輝かせている男（少なくとも男性型）とすれ違った時等、ヴィクターは思わず口笛を吹いてしまった程である。

曇り気味であるとは言え、その差異は月灯り、星灯りの下よりもはつきりと捉えられるものであり、ここまで来ると、非人型という呼称が適切なものやらどうなのやら　ちよつと間違えたら、非々人型でも通りそうな位　そして、そんな陽光に寄つて燈の灯が陰り、人間と人形との差異が逆に捉え難くなっているのは、皮肉以外の何物でも無い。薄目で目を凝らしても心燈^{バイア}が見えない自動機械^{オートマトン}は、また人間に負けず劣らず居た……在ったけれど、傍目には実に上手く潜り込んでいて、意識しなければ意識も出来無い有様だ。

「なあおい、メアリ。今ちよつと思つたんだが、」

と、脚元を平べつたい蟲の様な機械が通り過ぎて行くのを見ていたヴィクターは、ふと意地の悪い考えに思いを巡らせると、先に進んでいたメアリに声を掛けて、

『何でしょうか、ヴィクター様』

「心燈^{バイア}の有無……が、人間と人形の見分け方だつて、お前昨日言っていたよな？」

『ええ、その通りです……それが、何か？』

そして振り返り、手に手に握っていた先よりも大きめの筐体^{スーツケース}を地面に下ろしつつ、小首を傾げる彼女へ向けて、彼はにやりと唇を

釣り上げながら、ぐるり探し、通りの反対側の電気屋が前に佇む影

八本の脚と、一对の腕部を皿状の本体から生やし、筒状の眼を伸ばしながら、備え付けの画面に映し出されている、良質芳醇な蛋白質で構築された筋肉をこれ見よがしに晒け出している大男と、のたうつ蛇の群れとしか言い様の無い機械体との異種拳闘を、食い入る様に見詰めている　を指差して、

「だったら、今はどうやって見分けを付けたらいいのかね？　心燈^{バイア}なんて良く見えないぜ？　あの蜘蛛みたいな輩が人間か、或いは人形だって、どうやってたら解るんだい？」

『決まっているではありませんか』

そう言ってどんな解答が返って来るか待とうとしたが、結果は一秒も掛からずに、

「ほ、う？」

『本人に直接聞けばいいのです、「貴方は人間ですか？」 たったこれだけで済む話です……人形でしたら正直に否定してくれるでしょう、いいえ私は人形です、見ての通り、と……人間でしたら肯定した後、貴方を非難してくれるでしょうこの無作法者、貴方の眼は節穴か、と……簡単ではありませんか、何なら実践されてみたら如何ですか』

「あ、嗚呼……成程、ね？　いや遠慮しとくけど……」

メアリは半目になってそう応えると、しどろもどろしているヴィクターを尻目にスカートと鞆を翻しながら、優雅に回れ右をし

もう一つ、と、首だけを軽く向き返し、

『あの機体の題材は蜘蛛で無く蟹ですね……新しい眼が必要かもしれませ^{マキナ}ん本^{モチーフ}当^{レンズ}に』

再び前を向いて歩き出せば、いやはや、とヴィクターは髪を掻き篦り、その後ろ姿を、ぴんと張り詰めたままに途絶える事の無い背中を、眼で追い掛ける　蜘蛛も蟹も似た様なものじゃあ無いか、と思うのだが、この娘にとっては違う様で　娘、というのも、その違いが通じるなら、間違っているという訳になる。彼からすれば

正しいと感じられるものののに、と、その為に地盤は、頭蓋は揺さぶられて混乱を来たし、無知な主人の愚かな疑問と、対する侍女の賢しげな訂正が、こうしてまたも繰り返される

煙草、欲しいな、と、歩き歩き、人なのかそうで無いのか曖昧な者達とすれ違いつつ 結局、あの蟹型がどちらだったのかは不明のままに 掌で顎鬚と唇を弄りながらにヴィクターは思った

或いは珈琲だっていい、正真正銘、あの真っ赤に熟れた神の贈り物より造られた、魅惑的な飲み物をごくり飲りたい、と けれどもしかし、かつて確かに味わう事が出来た筈の芳しい紫煙は、正に霞と消えており、影も形も在りはず、思い出せば味わった事なんてある訳が無い未知の、神秘の液体は、その本物以上を謳う紛いものばかり大挙している 軒を連ねる店の前を通り過ぎる度、嫌でも目に付くのは、合成とか人造とか模倣とか、その様な文字を殊更に誇りを持つて書きこまれた看板であり表記であり、それが衣食住から各種娯楽に関わるもの全てにあれば 同時にそこに《エルゼノの黄金軌跡の？》が刻まれていれば 手を加えられていない事がまるで罪悪である様な物言わぬ気迫……いや、気取りというべきか、ともあれ、そういったものが感じられ、ヴィクターはやがてすっかり辟易としている自分へと辿り着いた。

この困惑 いや、もつとはつきり言ってしまうおう、嫌悪が何処から来るのか、彼は未だに解らない 脳髓なのか心臓なのか、何処かでは、メアリが言う事を正しいと感じているのに、同じ感慨を持つて、間違っているとも感じている 一体何が常識なものか、と、ここまで来たら、その要因が十五年越しの覚醒とは全くの無関係で、寧ろ眠りに付く前から、こうだったのでは無いかと疑いたくなるのは当然であり 参ったね、どうも、とヴィクターはガシガシ頭を掻きながら片方の眉と、片方の口端を同時に釣り上げた。過ぎ去って、まだ帰って来ない日々が、この都市で新たに始まった日々に影響しているという奇妙さ それは彼を内省に引き摺り込み、何か思い至らないものかね、これは、と自身の頭を指で小刻

みに叩くだけの作業へと没頭させ

『……お付き致しました、ヴィクター様』

そして気付いた時には、彼は、散策のもう一つの目的地へと到着していた。

そこは何の変哲も無い路地だった。建造物と建造物のその間、少々奥まった場所にあり、場所である為、人氣に乏しい点を抜かせば、特徴らしい特徴はまるで無い。細部に眼を瞑れば、企都ボリスの、繁華アゴ帯ラの、至る所に同じ立地を見出す事が出来るだろう。

「ここが、か」

けれどヴィクターは息を飲み、周囲を見渡してから道の一点へと視線をやった。

彼の濃い緑の視線の先には何も無い。ただ舗装された道路が伸びているだけだ。が、それは現在の話であり、数力月前余り前はまるで違う装いだった。

「ここが……最初の地という訳だね、メアリ」

ヴィクターはその様子を知っていた。勿論、当時の彼は器も無い心燈バイアで、実際にそれを見た訳では無かったけれど、フランク・レイニーが、彼の依頼主が、教えてくれたのだ。脳裏にふと蘇る明け方の夢、その粗筋は夢で無く現実で行われたのだ、と。

そう、こここそが、最初に《秃鷹》が降り立った、殺戮のその跡地であった。

？

その話はメアリから昨夜聞かされた。

《秃鷹》、猛禽、殺人鬼。決まって薄暮れ時の、繁華アゴ帯の盲点、人目に付き難い場所で、そいつの犯行は開始される。心燈バイアを持っているならば、通りがかったならば誰であつてもいいかの様に、道行く者へと襲い掛かりオートマトン。悲鳴が、絶叫が被害者の存在を知らしめるけれど、人々と自動機械オートマトンが到着する頃には事は既に終わっていて、

後には有機無機の内臓と、命の灯火をほじくり出された抜け殻だけが、被害者から犠牲者となった民の屍だけが、そこいらに転がされている。人間が手を下すまでも無く、苦痛と恐怖が奇怪さに置いて完璧な整形を施したその顔は、全ての犠牲者が、心燈バイテラよりも先に内臓を抉られ、弄ばれ、放り出された事実を解剖するより前に明白に告げていて、否が応でも、ある事実を知らしめる。即ち、本質を得ても尚、肉体は不可欠である事を、神々がそうだった様に、殺せば人は死ぬのだという事を。知らしめる、どころか、教えるかの如く、この企都ボリスに似付かわしく無い、生臭い蛮行は繰り返される。ぐるりぐると、獲物を狙う鳥が円弧を描きつつ飛び回っている様に、それは間隔を、本人以外に定かでない理由で空けられた間隔を持って行われ。懸命な警護と警邏の甲斐無く、その回数は既に十三人に達し、積み上がる遺体の数も同様ならば、それは未だに終わりを見せない。

？

内に向けられていた思考が翻り、裏返り、憤慨が沸き立つのを感じながら、しかし感情に乏しい、仮面の様な表情で、ヴィクター・ナイトはこの場をじっと見た。どうやら公衆衛生を目的としている、カタカタと走り回る蟲の機械がここにも居れば、跡地は跡地に過ぎず、行為の名残等、何一つ遺されてはいない。全て記録に収められている以上、何時までも留めておく訳には行かないのは解るけれど、これでは言われなければ、知っていなければ、誰も気付きはしないだろう。ほら、丁度その辺り、メアリが立っているその脚元まで、細長い腸が引き摺り出されていたのだよ、なんて

そうして、それは第二、第三、第四……と続いても、何一つ変わらない。目を瞑った細部へやれば、多少人気。自動機械オートマタンの場合は何といふべきか。があつたり、袋小路になつていたり、それ位の違いはあつたけれど、後片付けが終わっているのは共通している。

ほんの数日前に事の起こった現場であつても同様であれば、わざわざ出向く意味等無いとも言える　知識を得る、とその点に関して言えば。

けれども、散策の目的が知る事で無く感じる事であつたならば、その意味も成果も十二分である　見えないもの、そこに無いものでも、しかし肉体は、付随する精神は、確かに見る事が出来るし、あると捉える事も出来る　そうするつもりならば、それこそ余計にであり、そしてヴィクターはそうするつもりだった。

かくして星座は地上へと舞い降り、ますますにその輪郭を鮮明にし、彼に、この事態に対する動機と鋭気の両方を、以前にも増してはつきりと与え　それは一人と一機が帰途を辿る間も尚一方という風であれば、広場、市民達に公的な触れ合いを、憩いを与えている広場の中を通つて行く時も、ヴィクターの険しげな表情は崩れる事無く、

「なあメアリ……また馬鹿な事聞かかもしれないが、いいかな」
『それを返すのが私の役割です……はい、何でしょうかヴィクター様？』

「ええと、何だ……彼等に墓はあるのかな？　その、殺された人々には……」

「……」
「……メアリ？」

『……失礼致しました。余りに時代錯誤な単語であつた為、算譜機^{コンピュ}械が混乱した様で……しかし墓とは……在る訳が無いですよ。肉体は素材として再利用され、死とは、彼その者である心燈^{バイア}が消滅する事であります……一体何の為に作るのです？』

「……まあ、確かに……意味も無い、か……」

そう何時にも増して辛辣な響きがメアリの唇から溢れ出ても、酷い苦味は後を引き、左右対称で無い顔を、更にかけ離れた形にくれる程度のものであり、

『企都市民^{ポリス}なら、そんな風に悩みません。まるで市外蛮族^{バルバロイ}ですね、

ヴィクター様』

「前から思ってたがね、そのヘレネスとバルバロイってどういう意味なんだい？」

『この二つの言葉の意味は多岐に渡り、厳密に定義する事は酷く難しい……が、あえて説明するならば、それらはこの様に言う事が出来るでしょう……即ち、ヘレネスとは《バルバロイで無い者》であり、バルバロイとは《ヘレネスで無い者》である、と』

「そりゃまた便利なのが不便なのか、良く解らない定義付けだ事で、」

だからこそ、事 突如車道から飛び込んで来た運搬車輛が、悲鳴を受けつつ広場の中央に躍り出る 事が起こってもそれは残り、ただ凍り付いたままであり 反射的にメアリの腕を引きながら、ヴィクターはその眼を大いに見開いた。

突然の闖入者に困惑し、立ち止まる人々、如何な反応を取るべきかと思案げな自動機械オートマトンの意識の焦点、運搬用車輛は急停止の金切り音を上げつつ、広場の真ん中で停まった。と、溜息の様な音と蒸気と共に、その後部に背負った鋼鉄の輸送筐が物々しく開かれれば、中から現れたのは巨大な人型 大の男の背丈を軽く超える、筋骨逞しい形勢に、妙に角張った装甲と、爬虫類の頭蓋を思わせる一對の角付きの頭部を備えたそれは、仄かな陽光でもはつきり捉えらるる真黄色の単眼を、十字架状の軸に合わせて上下左右と動かし、辺りを伺ってから 徐に、車輛の外へとその一步を踏み出した。

ズン、という物々しい音が石畳を砕き、更にズン、おまけにズンと響き渡るや、周囲の市民達は、漸くとその事態を飲み込んだ誰かが上げた金切り声を合図とするかの様に、彼等は脱兎の如く逃げ始める 追い掛け出す、金属の巨人を背に感じながら。

その様子を、ヴィクターの手から離れたメアリが、直立不動の姿勢でじっと見詰め、

『……陸戦用巨兵像ギガント、型式番号【 208 ？】“ラドン”です。一機盗

難されたと報告がありましたか、こんな所に在りましたか。かつて

の貴方の愛機でもあり…… ヴィクター様？」

淡々と、何時もの調子でそう唇を開くが、しかしその聞き手はもう側に居なかった。

いつの間にか巨兵像^{ギガント}へ向けて、ヴィクターは走り始めていた

制止するメアリの声を無視しつつ、腰元から取り出した携帯端末^{モバイル}に

【¹⁰³?】を、護身とは名ばかりの射撃譜号^{コード}を打ち込みながら

その翡翠^{ヒスイ}の眼に宿るのは、不運にも踏み潰された蟲型の残骸であり、

そこから転々と続く足跡であり、今しもそれを形作っている巨人の

姿であり、そしてその先にて威嚇の咆哮を上げている一匹の、いや

一機の小犬型自動機械^{オートマトン}と、懸命に呼び止めてようとしている飼い主

らしき女性の、見開かれた濃い茶色の瞳^{ブラウン}であり

夢と現と幻が、三位渾然と一体に眼の前に現れるならば、衝動は熱を上げて氷を、理知を溶かし、溢れ出る本能に流されるままにして、ヴィクターはその引鉄を引いた。

カチ、という小気味良い音は、ギシュ、と紅く輝く光と成り、弾と化し、上代に滅び去ったという竜を模した頭部へと当たり

そう

して四散したのは光弾^{フラスター}の方で、何らかの処理がされているのか巨兵像^{ギガン}には傷一つ付いて居なかったけれど、しかし注意を削ぐ事には成

功した もう一発、更に一発と、追加譜号^{コード}等付けずに撃ち続けられ

ば上手い具合によるめきまで発生し、その隙に彼は、一人と一機と

巨兵像との間に割り込んで、

「おいあんな何してる、脚が飾りじゃないなら、その犬連れてさっさと逃げろっ」

そう名も知らぬ女性へ向けて言い放ち その瞬間、眼前はくら

りと揺れて、脳髄も一瞬空白と化し、彼はこの携帯端末^{モバイル}の動力が何

だったかをちらと思い出す が、今はそんな事に煩わされている

暇は無いと、頭を奮い立てて顔を上げれば、彼女も犬もまだそこに

居て、逃げる所か、その素振りも見せぬままに眼を見開き、何事か

叫んでいる ヴィクターは半ば驚き呆れながら、もう一度叫ぼう

として、はっと影が過ぎったのに勘付いた。

体は反射的に振り返るけれど、今更ジタバタした所で手遅れだ。

風のうねり声　　破碎音　　そして意識も眩む、鈍い激痛。

ひ、っという悲鳴が耳に入り、数瞬の、だが完全な意識の喪失の後にヴィクターは、何が起きたのかを把握した　　殴り抜けられた

巨大な腕　　罅割れ、砕けた脚元の石版　　だらりと垂れた右腕と、

流れ出る赤い雫　　カンラカンラと弾き飛ばされて行く携帯端末

迫り来る巨兵像^{ギガント}を収めていた筈の視界は上半身ごと反転し、口元を抑えている女性の方を捉えていて　　そこまで来て、彼は、あ、

とそれらが実は些事である事に、もつと重要で決定的な事実がある事に、迂闊にも漸くにして思い至った。

まだ、俺は、生きている……？

その思考は最初こそ半信半疑のものだったけれど、そう悩んでいる思考そのものが、苦痛に苛まれつつも原形を残している肉体があればこそ疑惑は確信へ変貌を遂げた。

活力が電流となって掌を伝え、呆然と立ち尽くしたままの女性に向けて、彼は微笑みを浮かべ　　盛大に擦れ回った格好では、本人が想定した様な効果を産むとは思えまいが　　喝をする様に手首を二度、三度と払ってから、小指から親指へと順々に拳を握り込む。それから、改めて振り向いた　　相手からすれば耐え凌いだという事になるだろう、明らかな動揺が不審な挙動として巨体に現れる中で、彼は体を捻り返し　　強引ながらも力強い体勢は速度を産み、勢いを呼び、そしてそれが頂点に達した所で一步を、踏み込む様な一步を刻めば、肉体の重みも共にして、ヴィクターはその拳を突き出した。

ゴン、という、金属に対する肉とは思えない打撃音が響き渡り

遠巻きに眺めていた市民もメアリも、少女も犬も、眼の前の光景に目を剥いた。

巨兵像^{ギガント}が傾き、倒れようとしている　　一步、二歩と、戻る様に後ろ向きの足跡を刻みながら　　罅とまでは行かないけれど、その胸部の装甲に白く凹んだ痕を浮かべて　　それでも、どうにか踏ん

張り、耐え切った所で、その頭部に人影が過ぎる。

彼我の体格差を埋める為の跳躍は、石畳を碎け飛ばしてヴィクターの身体を天高く上げ、そうして放たれたもう一発の右手は、狙い違わずその単眼を打ち抜き

彼が片膝を付いて降り立ったのと、巨体が大地に沈んだのは、殆ど同時の事だった。

仰向けに倒れ伏し、黄の光を消して沈黙した巨兵像ギガントを尻目に、ピリリ、ピリ、と刺激が右掌に迸るのを感じたヴィクターは、手を開いてじっと見詰めた。自分でも予想外の力だった。良く見れば既に血も止まっている。これは一体何だろう、と吐息乱しながら彼は首を捻ったが、しかしそれは実時間でほんの数秒の事。直ぐに疲労が、先の比では無い揺れを感じれば、やはり抗う事も出来ぬままに、彼はどさりと倒れ込んだ。

何処からか聞こえてくる騒々しい駆動音を耳にしつつ。銀の尾を振り振り駆け寄って来る子犬と、その後を心配げに付いて来る少女の姿を眼に映しながら

何はともあれ、良かったんじゃないか、ね……虚ろに霞がかった頭の中で、ヴィクターはそう歯を向いて笑うと、正に電源を落とす様な唐突さで、その意識を失わせて

？

そうして目覚め、始めに彼が眼にしたのは、フランク・レイニーが社長室を青から白に変えた様なタイル張りの天井であり、壁であり、それを背後と、寝具に横たわるヴィクター・ナイトを見下ろしているメアリの紫水晶アメジストの瞳で。何処かで覚えのある光景に、彼はぼんやりとしつつも自分が服。眠った時と同じ服を着ている事を慌てて確認し、安堵の吐息を吐き出せば、その既視感に本音半分乗っけて見て、

「やあメアリ……煙草、持っていないかい？　出来たらその、ライター点火器

も一緒に……」

そう微笑んだのはいいのだが、しかし彼女からの言葉は無く、反応はただ視線で戻ってくれば、その人間であって人間で無い造形に居心地の悪さを感じて彼は頬を掻いた、

『……貴方は知っていたのですか？ 改造について』

「……何だつて？」

そこで、先日聞かされた剣呑な単語を耳にして、彼はがばり起き上がってメアリを見詰める 合わせて一步下がると、彼女は抑揚の無い声音で淡々と語り出した。

「改造について……もう解っているでしょうが、貴方のその肉体は、特別仕様です。企都生活に溶け込み、且つ、不意を付いて現れる犯罪者を相手取るべく設計されています……内面と外面は別物、という訳ですが、尤も、内に込められた力を発揮する為には、外付けの要素が、ある譜号コードが必要となっています。鍵として、日常に支障の無い様に……しかし、それはまだお教えしていない筈です。いざという時で無ければ、滅多な事で使って貰っては困る……それが貴方の肉体に与えられた力……本来であれば不要で、分不相応な、しかし《禿鷹》を倒す為の力です。今回の場合は特殊な事例で、瀕死に陥ったからこそ、力の片鱗が覗き出た、という事でしょうが……貴方はそれを知っていたのですか？」

「ああ、いや別に……その、そうか……そうだったんだな……」

そんなメアリの説明を聞きながら、ヴィクターは右手に視線を落とした その表情は 半ば感心する様に、半ば誇らしげであったが、メアリの顔色は変わらず その様な機能は搭載されていなかったが 寧ろ眼に眼に陰しさを宿して、再度唇を開き、

『ではこういう事ですか……貴方は自分を知らず、何処にでも在る様な生体バイオスに収まった一市民の身と思いつながら、戦闘用の強化機甲服パワードスーツに戦いを挑んだ、と？』

「……うん、まあ……そういう事になる、ね？」

『貴方は一体何を考えているのですか、それとも何も考えていない

のですか』

その底知れぬ剣幕に不承不承と頷けば、何時に増して辛辣な台詞が飛び出して、

「な、何……何、って言う」と

『貴方の行動は、複数の点に置いて不可解で、何ならお粗末と呼んでもいいものです。幾ら十年以上に前に設計された機械とは言え……貴方がそれを知っていたとは思えません……^{キガント}巨兵像相手に無改造の個人が太刀打ち出来るなんて、まずありません。偶然、相手が未熟で、偶然、武装を備えておらず、偶然、特例が発動したから良かったものの、そうで無ければ今頃どうなっていたものやら……しかも、貴方がした事は、本当の警邏員^{ギガント}の仕事であり義務でした。放つておいても彼等が、専用の巨兵像を纏った彼等がどうにかしてくれた事でしょう……それに動機も不明瞭です。質問するまでも無くお解りだったかと思いますが、貴方が助けようと駆け出した人物は、^{バイア}心燈化しておりました……運が悪ければ分かりませんが、大概の場合、死とは程遠い位置に居ります。破損程度はしたかもしれませんが……加えてもう一機に関しては、人間ですら、人型ですら無い人形です。只の所有物であれば、身を投げ出す必要等ある筈が無い……もう一度聞きましょうか？ 貴方は一体何を考えているのですか、それとも何も考えていないのですか』

「なかなか酷い事を言うものだが……そう、だね……」

その後を追う様に、丁寧さで包んだ非難が続けば、ヴィクターは苦味を込めた笑みを浮かべて　これで侍女^{オートマトン}というのだから、そして自動機械^{オートマトン}というのだから驚きである　けれど直ぐに口元を一文字と切り結べば、何処か遠くを見る眼差しを浮かべて、

「……その質問に、逐一返す事は出来るね……例えば自動機械^{オートマトン}だらって破壊されてもいいというのは絶対間違つてると思うし、人間の場合だってそうだ、出来るのならそいつがするべき、じゃないかと……だが、それは今だっただけ言える事、だね……何も考えていなかった、それが正解だ。考えられる程、知識も時間も無かったから

……ただ、やらなければならぬ気がしたのさ。心燈^{バイア}、じゃない……

……俺の胸がそう疼いたんだ……」

『……………』

「……お解り？」

我乍ら長々と、しかも、ろくな説明に成ってない事をべらべら良く語れるものだ。そうヴィクターは言い終えると、自身への嘲笑を浮かべながら、メアリの方を見た。

緑と紫の視線が混じり合い、絡み合い

数秒経ってから、黙って聞いていたメアリは、ぼそ、っとその唇を僅かに開けて、

『そうでした……だからこそ、貴方が選ばれたのですね……』

仕方が無い、と、生体^{バイオス}であれば溜息を漏らしている様な表情を作りつつ、彼女はシーツの上に筐体^{スーツケース}を載せた。携帯端末^{モバイル}が入って

いたものより幾分長めに施錠が行われ、そうしてドサリと取り出されたのは、新聞^{ガゼット}と雑誌^{マガジン}の山であり、

『成果をお持ちしました、ヴィクター様。結局の所、事が起これば掲載されていたでしょうから……まあお読みなさったらいいのでは？ 貴方がどの様に思われたか、を』

「これはまた……実は大分眠っていたみたいだな？」

『ええ、数日程……しかし《禿鷹》は出てませんから、ご安心を』

そこで彼は、どれと気付かぬ間に経過した月日の内より紡ぎ出された、言葉の数々に目を通して行く。その数自体は沢山あったけれど、書いてある事は皆大概一緒であり、記事の大きさも、関心と興味の度合いを示す様に、小さくは無いが大きくも無い、というのが殆どで。白昼の恐怖、暴れ回る巨兵^{キガント}像。だが一人の市民が活

躍。目撃者の証言曰く、たった二発の殴打により、接続者の意識を刈り取ったのである。によって、事件は始めって数分、石畳数十枚程度の破損で解決された。その市民の正体は不明であり、格闘の後、気絶した犯人を確保した本社に寄れば、詮索無用との事で（『レイニー社長からの通達です、敵を欺くには味方から、だそう

で……普段の画像は残っておりますが』）犯人の名はロブ・ウィルストン（百十二歳）、元本社付きの巨兵像遣いであり、窃盗及び破壊活動の目的は例によって快楽と供述　駆け付けた警邏隊長ピアース・ゴドウィンは珍しくも近隣及び自隊員の犠牲を出さずに事件解決を見た訳だが、越権行為と捉えかねない、本社の市民の対応には強い遺憾の意を示して、

「『事件は警邏隊が解決する、一般人の手出しは無用、と宣言。更に、』……色々と酷いね、これは。自分が愉しむ為に暴れ回るってのも、この都市じゃ普通なのかい？」

適当に選んだ雑誌《クロウ・カサス》の質の荒い紙に映される、如何にも歴戦の兵然とした口髭の男を見ながら、ヴィクターがそう苦笑いを浮かべると、がさごそと、何やら筐体靴を漁っていたメアリは、見るとも無しに唇を開けて、

『そうですね。信頼は金銭を経ずに情報化され、物資の流通は本社の管理下、及び最低限の生活保障がされていれば、物盗りは殆ど無く、その様な罪が大半です。特に長い歳月、かつての平均寿命を軽く超えた者達に傾向が強く……歳月、と言えば、隊長の憤りもそこにあります。彼等警邏隊の賃金は、月賦に加えて危険勤務への従事時間に左右されますから。彼等にして見れば、報酬を横取りされた様なものでしょう』

「……誰が懸命な警邏だって？　世は正に青銅時代、って奴だな、それは」

『与えられた本性に則り、与えられた役割をこなしているだけです。時に軋轢を産む場合もありますが、それ自体は問題ではありません。寧ろ、貴方の態度の方が問題で』

「そんな事を言ったら、俺の場合だって、本性で役割だよ。特例警邏員、なんだろ？」

『特例と警邏で一つですからね、ヴィクター様……貴方の役割は鷹狩りです』

「だったら驚を狙ったってじゃないか……蜘蛛と蟹が似ているのと

同じ理屈さ、

そうして、ちらと上目に向けられたアメティスト紫水晶の瞳に対して、ますます苦味を加えながらヴィクターは、何とは無しにらりぱらりと頁を捲り　ふと彼はその指を止めた。

見開かれた頁にあったのは、淡い繊細な筆使いで単彩色と描かれた、建築物の間に佇み、両手を前と構えている光の巨人、いや巨神の姿であり、それと対峙している、全身を突起状の鱗で覆われ、焰を口に宿した二足歩行の竜の姿であり　何だこれは、と、ヴィクターが良く良く見れば、それはどうやら連載小説の挿絵であるらしいが、しかし何とも異様で、神秘的な光景で　心惹き付かれるものがある。

そこで彼は頁を戻し、そして作品の扉へ、題名へと辿り着いた。

Ｊ・Ｏ^{II}ネルレラク作、フェリシア・ダルウィツシュ画
フューチャー
『未来のプロメテウス』。

そこにはもう一つの絵、正方形に囲まれた焰を胸に抱く少女の輪郭があり、また同時に始めて読む人間の、つまりヴィクターの為の粗筋が、短く簡潔に纏められていた。

？

それに寄ると　この作品の舞台はもう一つの宇宙、バイア心燈が発見されず竜が滅んでいない世界であり、人々は生きて八十年、喰われて数年の命を抱えながら、捕食者にして敵対者たる竜から身を守るという形で発達した企都^{ボリス}にて、日々懸命に暮らしていた。

主人公アンリ・カンデラもその様な市民の一人だったけれど、彼はある時、とつくの昔に竜に喰われて滅び去ったとされる神々の唯一の生き残り、火の神プロメテウスから、かつて神々が奮っていたという力、アトム根源を統べる焰を授けられる。光の巨神とは、彼が力を使役する為に変貌　モバイル携帯端末を思わせる小さな棒状の機具フラッシュ・エルピスで変身した姿であり、彼は自身をアステリオス、

光輝なる者』と名付ければ、その人間が制するには余りに身に余る力を使つて、企都^{ボリス}を、愛する者達を護るべく、日夜現れる無数の竜との、終わり無い闘争に身を捧げて行く

？

荒唐無稽だな、というのがヴィクター・ナイトの読み終えた、嘘偽り無い感想だった。如何にも低俗雑誌^{バルブマガジン}の端っこに相応しい絵空事^{サイファイ}だ、と　だが、それでもその話は添えられた絵と同じか、それ以上は何故か気になる所であれば、なあ、と彼は顔を上げ、はい？と有象無象の紙片^{バルブ}を集め、筐体^{スリッケース}に仕舞い直しているメアリの方を向いて、

「この……ああ、プロメテウスって知ってるかな、メアリ？」

「……また物珍しい名前を出される。それは古い神の名前ですね」

「実在するかい？」

「ええ、勿論……曰く、技術と文化の提供者^{スポンサー}であり、かつて流れた虚言^{デマ}に寄れば、心燈も彼の神に由来するとかしないとか……また、^{とまあゆっし}塔咂重工^{マスコット}の守護企神でもありました」

「ありました？」

「その企業は、もう存在しておりません。卓越した技量を持ちながらも精神的に腐敗していたとされ、四百年以上前の企都戦争^{ボリスマキア}の折、我が社を頂点とするエルⅡゼノ企業連合が、その総力を上げて壊滅させたそうです。かつて退廃と繁栄を極めた企都自体は、今でも遺跡として健在ですけど、言葉無き無法者の巢窟^{バルバロイ}になっていて危険であり、付近への立ち入りは原則禁止とされております……そんな事よりヴィクター様、」

簡易な質問に木霊して情報の大波が返って来れば、何とまあ、とヴィクターは、紙面に視線を落とした　この作者は一体何を想い、そんな縁起でも無い神の名を作品に関する事にしたのかと、思考を

巡らせ　それを一言で、綺麗に纏め上げられてしまえば、彼はもう一度顔を上げ、一言何か言ってやろうとしたけれど、その言葉は両手で差し出された携帯端末^{モバイル}　先の巨兵像との戦いにて失くしたと思っていたものによって留められて、

「拾っていてくれたのか……と、しかしメアリ、こいつが何か？」
激しく打ち付けた筈なのに、傷らしい傷が見当たらないそれを感じしながら受け取った彼は、くるり人差し指を軸に回しつつ右手へと納めてメアリを見た。どうやらずっとそれを探していたらしい、筐体^{スリケース}を閉じながら彼女もヴィクターを見返し、

「貴方の態度を見ていて決定致しました……今ここで、譜号^{コード}を教えて置きましょう。で無ければ、余計な手間を増やして、いざという時に働けない可能性がありますから」

そうして白い前掛けのポケットより別の、銀色をした携帯端末^{モバイル}を取り出せば、彼女はカチリ、カチリ、と片手で握りながら片手で打鍵^キを押して行き　プシュ、と空気の抜ける音が微かに上がれば、ヴィクターの寝ていた寝具が畳まれ出し、慌てて立ち上がった所で周囲の白い壁も、天井も段々と床へ消えてしまつて　先と同じ意匠の広大な空間が、彼の眼前へと出現した。調度も無く、色彩にも乏しく、その癖、広さだけは有り余り、床と壁と天井の境すら定かでないという周囲の様子に、彼は困惑した様子でぐるりと辺りを見渡して、と、風景の模様替えの間も動かぬままであつたメアリは、自身の携帯端末^{モバイル}の内側、ヴィクターのものの同様、縦に九桁、横に四桁と並ぶ打鍵盤^{キーボード}を翳して見せて、

「まず間違える事は無いでしょうが【¹⁰⁰？】の打鍵^キを三回、連続で押してから決定を下してください。そうする事で、貴方の端末は待機状態^{スタンバイ}に入ります。その上で何か……何でも良いので言葉を発してください。音声^{ボイス}が貴方のものと承認されれば、端末はある特殊な波形を、貴方にしか聞こえない音を発します……それこそが、貴方の力を解き放つ鍵となってくれるでしょう」

「つまり……こいつが俺のフラッシュ・エルピスになる訳だな、と

……」

「……申し訳ありません、今何と仰られましたか？」

そう説明がされている間にも、ポオンポオンと打鍵^キを叩けば、水晶^{レンズ}体は紅い点滅を上げ始め　小首傾げるメアリへ向けて、何でも無いと頭を降ると、彼は端末を口元へ近付けた。そこでふと唇を閉ざし、視線を右斜め上に向けつつ、さて何と言って見ようかと悩んで見たけれど、自分で紡いだ連想があるなら、その言葉は一つしか思い浮かばず、

「……変身、って言ってみたり、ね」

照れ臭そうに笑みを零しながら、そうヴィクターが唱えるや、点滅は眼も眩まんばかりの閃光に　巨兵^{キガント}像を倒した時に感じた電流が、右手と言わず全身へと伝わって

変化は、瞬きする間も無く完了した。

「……お加減の程は如何でしょうか？　ヴィクター様」

《……悪くないね》

傍らに立ち、そう問い掛けるメアリに、ヴィクターはくぐもった声で返しつつ頷く。

それは眼に見えて解るものだった　視界は深く広いものとなり、立っているだけで、この空間の半分が見渡せる。活力が内と言わず外と言わず、肉体全てに迸るならば、その四肢は何処か蟲を思わせる、黒々と艶めいた装甲で覆われており　ぺたり触れた頭部もその装甲に覆われている事に気付いた彼は、厚みのある硝子の様な眼球を軽く叩きつつに、

《……鏡は、あるかな？》

ええ、ただいま、とカチカチ侍女が端末を操作する事で、床からせり上がり現れた、大きな縁無し^{ギガント}の姿見の方へ向くと、ヴィクターは改めて、己が新たな姿を確認した。

そこに居たのは、巨兵^{キガント}像も自動機械^{オートマトン}もかくやという、人型であった　体躯は、ヴィクターの輪郭がまさに、要所を銀の線で縁^{パイプ}どられた、漆黒の装甲で覆われていて、胸元から浮き上がった心燈^{パイプ}は、

光の強さ自体微かであつても、その色合いによつて強調され、確かな輝きを放っている。首の上には、半分以上を真つ赤な瞳に、水晶^ズ体に占められた顔面、いや仮面を備え付けていて　紅い光を返している眼は街路灯を思わせるも、全体の意匠はやはり蟲の複眼を思わせる意匠をしていて、

《……まるでホタルみたいだ……》

『ホタル　……とは何でしょうヴィクター様……貴方のお知り合いか何かですか？』

《いいや、別に何でも無い、気にするなつて》

そう不意に溢れ出た感想に対する問い掛けを、ヒラヒラと掌で払い除け　自分でも良く解っていないのだから聞かれても困りものだ　彼は視線を、その手へ向けた。

黒い手甲を嵌められた五本の指　ぐ、ぱ、と開け閉めを繰り返した後で、彼はギリリと限界まで掌を広げると、それから一つ一つと、小指から順繰りに指を曲げて行き、親指まで到達した所で、軋みを上げる程に拳を握り込んだ。与えられた本性と役割を確かめる様に　それが仮令こちらの意思を無視したものであつても、与えたのがいけ好き様の無い企業の長であつたとしても　確かに悔しいが　この体は彼の氣に入る所であり、　

《……ちよつと動いて見たい所だな》

『そう言われると予測しまして、この地下試験場にお連れしていたのです』

打鍵^{キー}数回で鏡が仕舞われ、入れ替わりと四方八方のタイルが反転し、裏返つた裏つまり表へと、黒字に人骨を思わせる白線が引かれた人型自動機械^{オートマソン}が大挙して現れれば、ヴィクターは仮面越しに笑みを浮かべ　カシャリカシャリと、金属音を上げながら機械達へ歩み寄りつつ、自分自身にだけ聞こえる様にこんな台詞を呟くのだつた。

《……アステリオスの初陣、と……ちよつと一発洒落込もうかね……》

?

・電気仕掛けの節度ある鳥葬

「認めてしまえ、そうすれば楽になる……どれだけ殻を纏おうと貴様は最早人間では無い……彼奴等の眷属で……そして彼奴等がそうであつた様に……我等の……」

そう途絶えがちな思念と共に血反吐を零れ出すと、白竜はぐつたりと息絶えた。

その蒼く美しい、だが光無き瞳に見詰められながら、アステリオスは頭を振るう。

解っている、解っている 解っている、と……

J・O＝ネルレラク 『未来の Prometheus』^{フューチャー}「例え何億回裏切られようと」

？

そうしてヴィクター・ナイトは洒落込むと、見事《秃鷹》を打ち倒したのだった。

？

頁を戻すのは勝手だが、無駄な徒労とお勧めはしない。容易い、呆気無い幕切れなのは認めるけれど、事実の一つだけであり、そこに疑念の余地等無いのだから。

即ち彼は彼と出会い、彼は彼を制した。それで事態は由緒正しき云々、である。

？

見渡す限り白タイルで覆われた地下空間での試験運用を、相対す

自動機械の半壊 オートマートン 算譜機械が収められた頭部には一切手を付けずの、駆動部のみの破壊 コンピュータ で片付けたヴィクター・ナイトは、その時より、本格的な依頼従事へと乗り出した。

彼の日常は概ね鍛錬と警邏に当てられた ビルディング 昼間は摩天楼郡の地下に籠もり、改造された肉体が何処処までの精度を誇るのか、多目的使役携帯端末・第四型とやらには他にどんな譜号があるのかを実際に試し、そして日が暮れ、空が薄紫に染まり出せば、彼はメアリを連れ出し、猛禽を求めて都市の路地という路地を巡り巡った。

それら自体はある意味短調であり、変化も少なかったけれど、しかしヴィクターは、もとい、アステリオスの活躍は、至る紙面に飾られた 侍女が同業が市民達が何と言おうとも、事件がそこにあるならば、彼は介入せずには入られなかったのである。

表面上は軽快に軽妙に、鼻歌交じりに譜号を打って変身すれば、太陽と月と星々の下、その改造を施された大いなる アトム 根源を統べる、とまでは流石に行かなかったけれど、しかし大したものであるのは間違いない 力を駆使して、並み居る悪党と、並み居る不良機械とぶらり戦い、その都度ヴィクターは、勝利の栄冠を飾った。

やがて謎の仮面付きの噂は、市民達の間で持ち切りとなった バイア 心燈を持ち、声と態度から装甲の中身が男性であり、そして自称アステリオス（それがとある低俗雑誌に掲載されている小説の主人公である事は、直に知れた）である事の三つは判明していたが、それ以外は定かで無い為に、誰も数日前に起きた広場破壊未遂の乱入者と彼を同一視なんてしなかったけれど、それでも話題になるのは好ましいものでは無い筈である が、しかし、エルⅡゼノ本社から、フランク・レイニーから特に警告も来なければ、最早黙認気味となつたメアリを引き連れ 変身し、それを解除する時になつて知つたのだが、装甲は彼の内側から展開するもので、その際に放たれる熱により衣服は灰と消えてしまう、彼女が持っていた筐体鞆の中身は、大半が彼の替りの衣だった スイツケース 次第に自警批判の声を高まらせて行く警邏隊隊長を尻目に、ヴィクターは宵の口から夜の都へと飛

び込んで行く。

それが己の仕事であり義務であり本性であり役割である。
ヴィクターはそう信じて疑わなかった

？

そんな日々が暫く続いた後、ヴィクター・ナイトは遂に《禿鷹》と遭遇したのである。

この所は、もう少し詳しく語っておこう　事と次第は、結末は、何も変わりはないけれど　一人と一機が、もう一人と出逢ったのは、例によって例の如くの薄暮れ時、何処にでもありそうな狭い路地の中であった。

周囲からは殆ど死角となっている上に、明かり乏しいという、襲い所としては実に優秀なそこを彼等が歩いていた時、不意を付いて、何かがばさりと落ちて来たのである。

メアリの先に行く様になっていたヴィクターは、片腕でその歩みを制止させた。

そして窺う　一瞬、それは塵か何かじゃないかと、彼は思った。薄汚れて黒ずんだ布切れ、継ぎ接ぎだらけの外套　だが、そこから木々生える様に腕が、脚が、背が伸びて行けば、現れたのは異形の人型で　ヴィクターよりも頭一つ小さな体軀を更に猫背と曲げていて、朽ちた翼の如く裾を垂れ流した腕先からは骨と皮ばかりの青褪めた左手と、鋭い嘴に似た、赤錆だらけの鉄の右手が覗いており、その顔は、頭巾付きの上に仮面　異様に高く突き出した鉤鼻の黒い仮面で覆われており、妖しげな呼吸音を上げながら、血走った琥珀色コハクの双眸を、爛々と輝かせている　その印象は鳥と案山子の間の子に見えたけれど、何にせよ、この企都ボリスに相応しい風貌では到底在り得ず、

「……次の獲物は俺、という訳かい……そっちから出て来てくれるとは、ね……探し回った甲斐があったのやら、無かったのやら、良

く解らないな……」

額から一筋の汗を垂らしつつ、ヴィクターはそう言うと、メアリへ向けて退がる様に合図する。その間、カタ、コリと言葉も無く右に、左に首を傾け、回している姿から一切眼を逸らす事無ければ、そつと懷から携帯端末を、彼のエルピスを取り出して、

「まあ、それも今日でお終いだね《禿鷹》……嗚呼、そうさ、」

お前を倒してお終いだ　そう呟き、ポオンポオンと、
100キ「？」の打鍵を素早く打ち終えるや、重心低く、殆ど這う様な姿勢で走り始めた猛禽へ向け、自分もだつと駆け出して　待機状態を
レンズ示す水晶体の点滅が周囲を、真横の顔を紅く照らす中、彼は言葉を端末へと唱えた　何時しか羞恥等消し飛び、当たり前と出る様になつた言葉を。

即ち、

「　変身……っ」

？

アステリオスと《禿鷹》の宿命付けられた戦いの火蓋が切つて落とされた。

けれど、傍から見たその様相は、宿命とは言い難い、いや、下手すれば戦いとも言い難い代物であり　邂逅の流れは、殆ど一方的に、ヴィクター・ナイトが握っていた。

それは拳振るう彼自身、全く以て思いも寄らない展開だった。

確かに、《猛禽》の動作は、恐ろしく素早かった。小柄である事を敏捷さに繋げ、巧みに近付き、華麗に退けば、まるで壁が床であるかの様に掛け上がり、と思った時には、本当に羽根があるかの如くに滑り降りて、カシャリと鋭く、前方へと突き伸びる機能の付いた金属の右手で持って、アステリオスの、ヴィクターの胸へ瞳へ襲い来る。

が、しかし、《猛禽》のする事はそれだけなのだ。それだけで、

しかも哀しいかな　と相對する側が考える程　彼の右手は、身体に張り付く薄い、だが確かに強固な黒い装甲に阻まれて臓器抉る事叶わず、所か、その表面に傷一つ付けられない。

しかもヴィクターには余裕が、出していない技術が、まだまだまだまだ、山と遺されていたのである　例えば、強化された身体にとってやはり護身用等名ばかりの光弾は、¹⁰⁶「¹⁴³？？」と打つ事で、威力を弾数に回した連射形式にする事が出来たし、¹⁴³「¹⁰⁶μ？」であれば、弾丸では無く光刃を成す事が可能である。語尾に追加譜号^{コード}を打ち込んでやれば、刃の形状だって思いのままだ。他にもあらゆる局面へ対応する為に、アステリオスの外見、形態そのものを速度重視、出力重視、その他諸々重視と、変更してしまう譜号^{コード}なんてものもあり　これなら勝てる誰にも負けない、とヴィクターは、その与えられた諸機具^{デヴァイス}を地下で試し、使い熟す様、訓練を重ねたのである。まるで玩具で遊ぶ児童の様に嬉々として、である。

ならばこそ、この《禿鷹》　この猛禽、この殺人鬼の弱々しさは、拍子抜けを通り越して落胆すら覚えてしまう程で　けれど大きく嵌め込まれた真つ赤な水晶^{レンズ}体の下、鮮やかに緑な眼の前に、死者達の顔、顔、顔が、点在する星に似て浮き上がるならば、余力有り余らせても容赦等在る筈が無く　強者対弱者の印象は、更に強いものになって行く。

と、そこで先に、殆ど、と付けた様に、一度だけ、優勢が揺らいだ瞬間があった。

それは何十回目かの接触が、アステリオスの強固な受けからの一撃と、《禿鷹》のそれだけは見事な回避で終わった後の事　グルングルンと、距離を跳んだ猛禽が、行き成りその身を沈めてから、脱兎の如く走り出すや、ヴィクターは当然の如く迎撃の構えを取って　けれど彼は、眼の前の敵を完全に無視した。振り下ろされる拳から身を捻りつつも両脚は止まらず、ヴィクターの横を素通りし　メアリ目指して駆けて行く。

はっとして、その狙いに彼が気付いたのと、甲高い悲鳴が上がっ

たのはほぼ同時であり　振り向いた時には、遠くに離れていた筈の侍女の体が、眼の前に迫っている。

ヴィクターに選択肢は無かった　だんと、コンクリート 混泥土に跡を残しながら、彼は背後へ跳んで　軌道は、水平がかった放物線を描きつつ落ちて来る彼女のそれと重なり

諸共に地面へと叩き付けられながら、一人は一機の身をしかと抱き留めた。

硬く結んだ腕をそつと開け、大丈夫かと問い掛ける　と、そこには照れも怯えも無いメアリが真つ直ぐ上目に見詰めていて、ヴィクターは思わず安堵の吐息を吐き出し、

『……そんな事よりヴィクター様、奴が逃げますっ』

瞳が見開かれると共に叫ばれたその言葉で、自分が先まで何をしていたのかを思い出すや、そう慌てて振り返る　見れば、既に《猛禽》の姿は遠く、遠く、路地の彼方であり、正に這々の体と、ヴィクターから、アステリオスから、脇目も振らずに腕を、脚を奮つて必死と逃げている真つ最中で　その余りにも無残な姿に、無防備に晒された背中に、昂っていた戦意はがくり崩れ落ちそうになるも、十三人の人々を思い起こしてどうにか振るい立てば、メア리를そつと降ろして、彼は彼の後を追いつけて行く

？

瞬間はこれで過ぎ去り、そしてもう二度戻つては来なかった。

その後には落ちが　盛大で身も蓋も無い落ちが待ち受ける。

走り、走り、走りながら、ヴィクター・ナイトは携帯端末モバイルを握つた。やはり動作だけ速ければ、離れずとも近寄り難い《禿鷹》の背中を紅々と浮かび上がる両眼で追つて　そこで視線逸らさずと打ち込む譜号コードは指が覚えてしまった【¹⁰³？】であり、本当なら使いたくなかったけれど、しかしそうとも言っていられなければ、ざつと片脚を曲げ、滑る様に膝を付き、片腕を支えと端末の先端を、銃

口を向け、路地を出た先の通り、心燈ハヤと電飾ネオンに寄って彩られた縦と伸びる夜景の元、揺らめく裾に狙いを定めて

そして、いざ引鉄を引こうとした正にその瞬間、《禿鷹》の体が行き成り消えた。

眼前から標的の代わりに夜の街並みが現れ、ヴィクターは端末を下ろす。

正確に言つと、極限まで高められた視力に寄って、彼は猛禽が消える瞬間を目撃していた。だが脳は、変身前でも後でも変わっていない神経の中枢は、余りに信じ難い、唐突な光景に、その事実を一瞬飲み込む事が出来なかつたのである。

ヴィクターがアステリオスの真つ赤な眼を透して見たのは、《禿鷹》が遂に路地を抜けて大通りへと飛び出した瞬間であり、その横から、筐オトカートというよりも塊と、或いは壁と呼んだ方が適切に思われる運搬用自動車輜オトカートが現れ、その小さな体を轢き飛ばした瞬間であつた。

パン、という強烈な、しかし些か拍子抜けの音もまた聞こえ暫くの間、彼は呆然と、その場に立ち尽くしていた。避ける暇も無ければ身を守る事も出来ずと、通り過ぎる車輜にぶち当たり、正に鳥と飛んで行った殺人鬼の影を頭の中で反芻する様に、が、直ぐに甲高い急停止音と共に人々の悲鳴が、ざわめきが耳に飛び込んでくれば、ヴィクターもまた再び動き出し、大通りへとその身を晒す。

周囲には市民と車輜がごつた返していた。人型も居ればそれ以外も当然と、素材も肉に鉄にと様々で、自前乃至車輪付きの脚を止めて屯していれば、アステリオスの姿も然程異様なものでは無く、時々指差され、意味深に囁かれながらも、彼は人集り掻き分け、その中心、油の様にどす黒い血を流しつつ仰向けに倒れている《禿鷹》へと近付いて行く。

側には、手入れの行き届いているとは言い難い色合いの、鉄製の缶に手と眼と心燈ハヤを付けた様な機体マキナの市民が、耳障りな電気音で近

くの野次馬へと声を張り上げていた　『俺ジャナイッテ、俺ノ粗製体ノセイナランダッテ』　けれど、そんな彼（多分）を黙らせる様に円筒状の胴体を押しやり、ヴィクターは《禿鷹》の前へとやって来た。

その姿に、漸く彼が昨今話題の人物である事が判明して来たのか、視線が、指先が、ざわめきが一層と増し始めるけれど、しかしアステリオスは佇んだままである。

紅くなつた瞳に映るのは、死に体の殺人鬼　技術技能が擬似的な不死を齎した企都にあつて、無辜の魂を、心燈を、十と三つも永殺した、恐るべき存在　である筈だけれど、とてもそんな風には見えなかった。この弱々しく息絶え、正に風前の灯火と心燈だけを輝かせている者と《猛禽》、そしてその所業を一致させるだなんてヴィクターには到底不可能な事であり　交わされる声、声、声と混じつて、力強い駆動音も上がっていれば、事実そうである様に、彼等の方が余程殺せる事だろう　在り得ない、在り得ないという想いも一杯と、自分でも意図せぬままに、彼はその片膝を付いた。

そして、一目顔を拝めば納得もするかと、両の手を近付けて《とうとう尻尾を現したな、アステリオス　手を頭に跪け、お前を拘束する》

物々しい脚音と共に、背後から声が響き渡つたのは、正にそんな時だった。

ヴィクターは、そのくぐもつていても荒々しさが伝わってくる壮年の男性の声に覚えが無かつた　部屋には放映筐も演奏筐も無かつたのだから　けれど、ズンズンと同様に続く駆動音はかつて聞いた事があり、はて何処だったか、と考える間も無く、群衆と代わつて何機もの巨兵像　愛機にして敵機であつたラドンよりも小型且つ小振りであり、白と黒の双彩色をした装甲は嫌に軽そうではあつたけれど、銘々、体格に見合つた銃剣付き旋条銃で武装しているが周囲を取り囲むならば、答えは明白であると言わざるを得ず　何でこんな時に限つて、と、彼は仮面の内側で表情を歪め、そ

う舌打ちした。面倒になる事請け合いだから、これまで遭遇しない様気を付けて来たのに、合わせてあちらも、その手際の悪さを存分に発揮してくれていたというのに……

《……ちよつとは余韻に浸ったつていいんじゃないかい、ビアース・ゴドウィン警邏隊隊長？ お互い、ちゃんと逢うのはこれが始めてなんだ、水を差せる様な関係じゃないだろ……と、それに俺は、捕まる様な真似をしでかした覚えはないぜ、全く》

少なくとも今世では　そう言うとも無く付け足しつつ、ヴィクターは、先の警告を無視して、すつくと立ち上がった。高低差僅かな動作でも動揺が広がれば、がたりと無数の銃口が向けられ、彼は、はあと吐息を漏らす。彼等の、警邏隊の言い分は《クロウ＝カサス》で良く知る所だったから、やっぱりな、としか思わなかったけれど、破顔一笑と、野太い笑い声が耳障りに木霊すれば、ビアースの意外な指摘がその後につき、

《誰か一人が皆の邪魔をするか、邪魔になる事を罪と言う。お前相当俺等邪魔なんだぜ提灯野郎……だが、そこは許してといてやるよ、何せ俺達は寛大だから……だがアステリオス、こいつは駄目だぜ、え？　蕪湖の市民を害すなんて……心燈は無事みたいだがね……とてもじゃないが、見逃してなんてやれないね、なあ、おい》

《おいおい、それは、》

誤解だ、と返そうとして、ヴィクターは唇を嚙んだ　本当にそれが誤解なのか、自分でも良く解らなくなったのである。視線を落とした先に倒れている小汚い男の素性を疑ったのは、疑っているのは、他ならぬ自分ではあるまいか……

《それが何だか知らないが、話はじっくり署で聞かさ……覚悟しろよ》

そこで紡ぎ出される沈黙を同意と見なしたのか、ズン、ズンと脚音を響かせ、巨兵像達^{ギガント}が近付いて来る　首を廻し、体を動かし、輪を閉ざそうと迫るそれらを見ながら、さてどうしたものかとヴィクターは考え　そうして猛烈な爆音が、排気音が包囲網の外でか

ら進れば、内なる思考より引き摺り出されて、彼ははつと顔を上げた。衆人も警邏隊も、誰もがそうである様に、動きを止めたままに、音の出処へと瞳を向ける。

鉄と鉄の格子をヴルルンと抜けて、道の彼方にヴィクターが垣間見たのは、一台の自動二輪オートサイクルだった。黒く鋭利な体躯の前に、双眸を思わせる切れ長の灯光を紅々と宿し、車体の右側には側車サイドが、形も色彩も本体同様に備え付けられている。乗り手の顔こそ、黒い覆いの兜で覆われ、見る事は叶わなかったが、しかしはためく白いエプロンドレスは、容易に、少なくとも彼にとっては容易に正体を伺わせるものであり、それが風を切り、音を超えて、人間と機械と車両の間を抜ける様に大通りを突っ走って来るならば、立ち尽くしたままの警邏隊を尻目にヴィクターは混凝土コンクリートを踏みしめて捻りを加えながら宙を跳び、脇を通り過ぎようとする二輪の側車サイドへと飛び乗った。と回りが気付いた時には既にしてその影は遠く来た時と同じ速度で去っている。

一瞬の間の後に《何をばさつとしているさつさと行け》なんて怒声ギガントが上がるや、巨兵像達は慌てて脚部内臓の車輪を繰り出し、白い裾を追い掛け始める訳だけれど、地力に加えて先行時間が重なれば、距離は縮まるどころか、刻一刻と離れるばかりで

《助かったよメアリ……そういえば、こいつを使うのは始めてだったな》

側車サイドの中で身を振りつつ、後ろへ、後ろへと徐々に見えなくなつて行く巨兵像を眺めながら、ヴィクターがそう言つと、メアリは前傾姿勢のまま、兜越しに顔を向けて、

『提供者から一言御座いまして……専用の算譜機械コンピュータまで載せたのだから、一度位は活用してくれ、と……恐らく、この機を逃せば、二度と使う事は無いでしょうから……勿論、貴方が私を無視して《禿鷹》を仕留めれば、その前にお蔵入りだったのですけれど……』

《誰が誰を無視出来るって？……いや、そんな事はどうでもいい、か……》

その視線を、仮面越しに見返してから、ヴィクターはぐたり座席の中で姿勢を崩す。

実は操縦卓ハンドルを握られているだけの、体を預けられているだけの二輪が、与えられた思考範疇の中で、ヴルル、ヴルルと咆哮を上げながらに次から次へと車輛を追い抜いて行くのを感じつつ、彼はカシヤリ、アステリオスの仮面を外し、

「では、これで終わった訳だね……俺は、猛禽を仕留めた訳か……」

『ええ勿論その通り……おめでとうございます、ヴィクター様』

「……どういたしまして、メアリ」

侍女の言葉に、そう力無く応えるのだった　光り無き兜をぐてつと高速で流れる地面に近付け、もう一方の手で汗ばんだ顎鬚を、硬く結ばれた唇と共に撫でながら

？

こうして責務は、二度目の生の目的は、見事に成就を見せたのである。

コングラッチエレーション　自足する人々にこそ幸福は属するのである、ヴィクター・ナイト。

そう、それは変わらない、何一つ変わらない事実という奴である　彼が、ヴィクターが、そこに微塵の納得も見出せなかった事は、付け加えて置いた方が良さそうだが。

それは追手を切り抜け、繁華帯アユラの中の隠れ家　まさか警邏隊も、こんな渦中に居ると思っていまい、なんて言う事は、度重なる逃亡の末に判明している　に辿り着き、アステリオスとその他諸々の提供者スポンサー、フランク・レイニーからお褒めの言葉を授かった後でも、それこそまるで変わらぬ感慨だった　それ自体は始めて聞く、だが態度に寄って、携帯端末モバイル越しても誰だか解る声を耳にすれば、寧ろ増して行く一方で

？

やあ、ヴィクター・ナイト、久方ぶりだな、元気にしているかな……

お陰様で、ぴんぴんしてるよ、フランク・レイニー……あんたは、余り元気が無さそうだな？　まるで年老いた……失礼、それがあんたの普段器だったっけか……

そついう事。いぶし銀と思わないか？　ヴィクター……

声だけは、ね。だが喋り方があんた丸出しだぜ、フランク……

手厳しい事を言うなあ君は。心燈バイアが一緒なら、思考も一緒。そつだろつ……

悪いね、そついう性分で。ま、そんな事は解っているよ……

いや、いいさ、解っているならね。ともあれ、では本題に移ろつか……

そつしようかい。全く、通信費用も安くあるまい……

本社に費用なんて無い様なものなのだから気にするな……メアリから、そしてさつき放映テレビ筐で知ったよ。《秃鷹》を倒してくれたね。おめでとつそしてありがとう……これで企都ボリスの平和は護られた……全ては君のお陰だ、本当に感謝するよ……

これは一度言っただけだ、もう一度言っておくね……どういたしまして、フランク。だが、捉える事は出来なかった。奴さんの身柄は、警邏隊の所かな……託宣ニュースじゃ、一体どう言ってるんだい？

生憎と、こっちは這々の体で逃げて来たばかりでね……投映筐テレビなんて便利なものも、ここには置いて無い訳だし……

ははあ、君の暮らしは質素だったからな、これが終わったら物を揃えて見るのも悪くはあるまい……それでは質問に答えよう。確かに君の活躍は大いなる誤解を産んでいる様だ……嘆かわしい限りだよ、アステリオスの名が堕ちるのは。だがしかし、英雄に中傷は付き物さ、ヴィクター、気にする事は全く無い。仮令誰が何と言おうとも我々は、君がどれだけの骨折りをしてくれたかを、存分に知っているから、ね……

それはどうも、フランク・レイニー・エルゼノ社長……

もつと喜んでくれて良いのだよ、我等せいぎみかたの英雄よ。嗚呼、それと《秃鷹》の身柄だが、確かに警邏隊が確保している様だ。後で遣いを出すでしょう。重大事件の重要犯人だ、本社直々と扱わねば行くまい……粗雑に扱ってくれて無ければ良いが、ねえ……

……フランク、その《秃鷹》について聴きたい事があるんだが……

嗚呼、メアリが言っていたね。アレの強さについて、だろう？
ヴィクター……

そう、そいつだ……あいつは、びっくりする程弱かった。猛禽どころか、ありや雛鳥だ。で無けりや病氣持ちの……誰だってあんなのが十三人も手に掛けた殺人鬼とは思わないさ……俺だってね。なあおい、あいつは本当に《秃鷹》だったのかな……

質問を質問で返す非礼を許してくれ給え、ヴィクター……も

し君がアレを《秃鷹》で無いと思うならば、その無法者は何だと考
えるね？ 時間もぴったり場所もばつちりと襲い来る……加えてそ
の外見と来たら……おお、何とおぞましい姿の事かっ……

……悪いねフランク、それを言われると、答えに窮すしか無
いさ……

そうだろう、そうだろう？ 詰まる所、君が感じているのは
負い目なんだよ、ヴィクター。余りに簡単に済んでしまったものだ
からね。だがそれは、我々の技術と、君の心燈バイアが、実に素晴らしい
ものだった証左でもある……念には念を入れた結果が、度を超えて
しまったというだけに過ぎんよ。何、気に病む事なんてまるで無い
さ、ヴィクター。もし仮に……仮にだよ？ アレが《秃鷹》で無か
ったとしても……君は一つの悪を制したんだ。その事實は、胸を張
って誇るに足る代物だよ、間違いない……

ならいいが……そうそう、それで俺はこれからどうしたらいい
のか、な？……

いや全く……うむ、過ぎ去った事は忘れて、これからの事を
話そうか。君は我々の期待に応え、目的を成し遂げてくれた。君が
誤って手に掛けてしまった心燈バイアと、アレが不当に手に掛けて来た、
そして手に掛けて行くだろう心燈バイアの数を思えば、その働きは、君の
大罪を清めるに十二分のものである。寄って、我々は君への恩赦を
完遂する。君に与えた物一切はそのままに、今回の報酬として相応
の額を与え……それから、君が喉から欲していだろうものを惜しま
ず与える。君は自由だ、ヴィクター・ナイト……

……自由……

嗚呼そうだよ……もう一度言おうか？ 君は自由だ、ヴィクター。先に言った仮でも無い限り、我々から関与する事は最早あるまい。再出発としては些か手間取ってしまったが、何、死は遠く、在るか無いかの代物さ。これからは、その有り余る時を、君の好きに生きるがいい。アステリオスの汚名を返上し、再び人々と都市の為に戦うもよし、或いは、他に何か仕事を見つけたって構いはしないさ。選択は無限だよヴィクター……何を戸惑っているね？ 自由は、勇者が最も欲するものの筈だがなあ……

……いや、ええと……何だろうな……嗚呼そうだ、メアリはどうなるんだい……

ソレについては君の一存に任せようヴィクター。その自動機オートマ械トシに關しても、君に与えた物一切の内の一つだから、ね……こう言っちゃ何だが、美しい人形だろう、メアリは？ サンドアイズ社の器造りは芸術の域だからな。当然、中身まで完璧さ、愛でてよし、食べてよしだよ、素晴らしい……まあ、君が気に入らないというのなら仕方が無い。家の前にでも出しておいてくれ給え、業者が回収してくれる事だろう……

……あんた、もしかして巫山戯てるかい？……

いいや全く……どうやら君は人形愛好家ヒグマリオンの気があるらしい。否定はしないが、お勧めもしないな。心燈バイアも無い輩に入れ込むのは、人として健全とは言い難いよ……

放つといってくれよ社長？ 選択は自由そして無限……そうじゃないか？……

これはこれは……はは、確かにね。私が悪かった、許してく

れヴィクター……

いいや全く……気にするなって、フランク、お互い様だろう？……

そう言ってくれると有難いね……と、では済まないが、そろそろ切るよ。改めて言うが、本当に感謝してるんだヴィクター……君の前途に、灯が在らん事を……

そちらこそ、フランク……あー……あんたの前途に、灯が在らん事を……

？

『……社長は、何と仰られておりましたか？　ヴィクター様』

そして携帯端末の引鉄を前へと押し、思わず吐息を漏らしながらヴィクター・ナイトは、そう一心と、変わらぬ表情で見詰めてくるメアリに向く事無くに唇を開けて、

「大した事じゃないさ……俺は用済み好きにしな、と……」

答えてから、そして君も、と付け加えそうになり、ぐっとその言葉を飲み干し、

「とりあえず……何も変わらないかな。何も、変わらない……これまで通りさメアリ」

？

けれど、実際の所そうでは無く、ヴィクター・ナイトは自由を持って余していた。

フランク・レイニー曰く、それは勇者が最も欲するものであるらしいが　しかしヴィクターは勇者では無い。未だ半信半疑のまま

の十五年前ならば兎も角　ただしその一端には、自ら引導を渡してしまっている　今の彼は、莫大な資金と、過ぎたる性能と、ただ一つの靈魂を持った、迷える一人の企都市民^{ボリス}、自動機械^{オートマチック}の主人でしか無い。

そして良く良く思い返して見ると、数週間前に目覚めてから、彼はこれまでよくに先の事を、未来の事を考えては来なかった。その最初の一瞬からして、メアリが居てフランクが居て、そして《禿鷹》が居て　エルⅡゼノが在ったのである。まずはこの企都^{ボリス}の為、猛禽を打たねばならないだろう　そんな想いが、指針が先行して来たのが当たり前の状態だったならば、突然無くされても戸惑いしか感じない。

しかも弱った事に、ヴィクターには当分の間　それが百年先か、二百年先か、更にもっと先なのかは定かではなかったけれど　今の生活を楽々送って行けるだけの資金を、エルⅡゼノ本社から与えられていたのである。携帯端末^{モバイル}を通して数字記号^{イオリア}を投影してから、そこに込められた意味合い、つまり何が一体どれだけのお値段であるかをメアリに聞いた時、帰って来た答えに、度肝を抜かしてしまう程の　フランクはそれを相応の額と称したが、しかしヴィクターにはとても信じられない程の額を貰ったのだ。

人生に置ける大局的目的も無ければ、労働の必要も無いという状況に置かれ、さてどうしたものかと、ヴィクターは困惑する　未来が駄目でも過去ならば、と言いたい所だったが、しかしピンボケな頭は未だに十五年前の自身を浮かべてはくれず、今ここに居るメアリはと言えば、正しく彼の一存で、返って来るのは紫水晶^{アメジスト}の瞳ばかり

ヴィクターがその日々を無為に過ごし始めたのも、宜なる哉、という所であろう。

《禿鷹》を下したその翌日から、彼の日課は変わった　昼間、専ら赴いていた地下試験場は、最も縁遠い場所と成り、代わって、喫茶店^{カフェ}と簡易食堂^{タヴェルナ}、そして広場が、太陽降り注ぐ彼の馴染みの場と

化した。ぶらぶらと当て所無い散歩に繰り出せば、機体用の蓄電槽マキナと並んで供される、実に美味しそうに盛り付けられた料理の写真付き合成材食　シャキン、サキンと齒応え充分過ぎる、白く濁った棒状の未加工品　の、方向性だけはばっちりな、だが外見と感触はやはり料理の要だと痛感させられる味わいを堪能し、人造珈琲の化学的な芳香でぐいっと洗い流す、もとい、後味を上塗ってから、今にしてその手間暇が解ってしまった　それでも慣れた訳では、認めた訳では決して無い　メアリの夕食が出来上がる時まで、広場の長椅子にでんと横たわり、人目も憚らぬの昼寝か、《クロウ＝カサス》含む低俗雑誌バルブマガジンの読書へと勤しんで行く

そうして薄暮れ時が音も無く近付き、夜の帳が天を覆えば、見た目も噛み応えも完璧な、しかし何処かでやっぱりおかしいメアリの料理を堪能したヴィクターの舞台は、繁華帯アユラの大通り、電飾ネオンと心燈バイアに彩られた人々の活気溢れるものへと変わって行つて　悪辣な煙と擲掬される煙草（と、おまけに点火器ライター）は、やはり手に入らなかつたけれど、酒と女は、ちよつとうんざりする程転がっている。その二つが醸し出すシャトー・ジュンヌデュニョの守護企神スの宴が具合は、当たり前のように管理、運営されたものではあつたが、しかし陶醉出来る事実には変わりなく、ちびりちびりと模倣果実酒レッシナ啜りつとヴィクターは、形成された神聖巫女オラクルの群れへと招き寄せられ、覚束無い前世の記憶がままに、ふらふらゆらゆらと手を伸ばして　幾度目かの呆然が自失を迎える頃には、天井は見覚えのある白漆喰に、巫女は電気仕掛の侍女になつており、何の奇跡か、グラスの中の酒すら何の変哲も無い人口水と変わっていれば、軋む頭はそれを欲し、合わせてぐいと空にする

これがヴィクターが送る毎日であり、その昼と夜との繰り返しの中で、彼の秘められた力が、アステリオスが出る幕は余り、いや、殆ど無いと言つても過言では無かつた。

少し距離を置いて始めて実感出来ただけけれど　自分の体だつてそうなのだから、これは迂闊ハイアとしか言い様が無い　心燈化した

市民は実に死に難かつたのである。

勿論心燈^{バイア}を破壊されればそれまでだが、しかしそんな事は、誰も彼もが知っている事実である。胸部の造りは強固なものだし、その立ち振る舞いも自然と心燈^{バイア}を護る動きが身に付いて行く。貧弱と罵った《秃鷹》すらそうだった様に、自動車輶^{オートカート}に轢かれたり、全身を強打したりする位では、もつと極端に言つて、四肢を切断されたり、頭部を粉碎されたり、内臓を抉られたりする位では、彼等はびくともしないのだ。勿論それは生体^{ヴィオス}での話であり、機体^{マキナ}ともなれば、正に言わずもがな、である。その際に生じる苦痛は不快には違いないが、しかしそれだけであり、心燈^{バイア}が脅かされる事は稀と言つて構うまい。

だからこそ、猛禽が十三人の心燈^{バイア}を手に掛けたのは異常であつた。あくまでそこが焦点であり、屍体の散乱は二次的なものに過ぎない。訳だけれど、しかしフランクが認めた所の犯人が捉えられた事で、そんな凄惨な事件もぱつたりと途絶えてしまつてゐる。こんな状況なら、都市の治安は警邏隊だけで充分で、実際これまで充分だつたのだ。確かに、その行為は遅々として進まず、その癖、傍目の損害も酷いものだったが、中身まで、心燈^{バイア}まで損害を与えない、与えさせないという意味では警邏隊の活躍は一貫しており、その評価も一定のものを保っている。外見まで気にし、不可欠では無い介入を行つて来たヴィクターの方が市民からすれば風変わりで、それ故に話題と上がつていたのである。猛禽がそうであつた様に……。

ならばこそ、《秃鷹》の消えた今となつては、その対抗者たるアステリオスの存在も消えざるを得ず。と同時に、その気概すら、ヴィクターの中から消え掛けていた。

その原因は直接的というよりも間接的なものであり、エル・ゼノ社の長から、自身を『人形愛好家^{ヒグマリオン}』と評されて以来、彼はますます持つて、市民達の自動機械^{オートマトン}に対する態度が、或いは、自動機械^{オートマトン}の市民達に対する算譜が、氣になつて仕方が無くなつていたのである。

殆ど同じ姿なのに、同じ態度なのに、心燈バイアの有無に寄って価格が
変わる巫女に、心付けすら貰えない給仕達 道行く人々、そして
店々の前から放たれる、人型生体乃至人型準拠である事のさり気無
い自負 辛辣な皮肉を、批判を交えながらも、その実、こちらの
意を常に伺い、その行動に反映している紫の瞳 そして無造作に
踏み潰され、誰にも顧みられる事無いまま、同属に回収される運命
を待つ、虫型公衆清掃機械

それらの様子は、縦令陽光に呆けていても、酒気と淫気に溺れて
いても、まるで変身した時の様に視界の、意識の何処かに引つ掛か
って取れず 混泥土コンクリートの上で平たく伸びている機械の残骸を見る度、
ヴィクターはこう思い出さずには居られなかった。

即ち 広場での巨兵像騒動の時、石畳は数えられ、この機械は
上がらなかった。誰も何処も、こいつを損害とすら考えなかったの
だな、と 何故瑣末な、正しく虫けらの様な機械に対してそんな
風に思うのか、自分でも良く解らないままに

？

こうしてヴィクター・ナイトは、自己と周囲の両方に対して悩み
を抱き、答えを出す事叶わぬままと、ただただ在るがまま、無用の
ままと、その時を消化していった。

はつきり言ってそれは、仔細に書く必要も無い日常であり も
し、このまま何事も無く続くならば、物語はここでお終い、由緒正
しき云々と締めるべき所であつたらう。

だが結局の所、運命は、彼を放つては置かなかった。

転機が訪れたのは、太陽も後は沈むばかりとなつた昼過ぎ、今と
なつては先の事件の痕跡なんて何一つ残つてはいないあの広場にヴ
ィクターが赴いた時の事で 何時もの様に、美味には違い無いが
味気無い食事を公衆食堂で済ませた後、他の市民達の中に混じつて
お気に入りの長椅子に座り、《クロウ＝カサス》の頁を捲っている

所だった。

その雑誌の過半はくだらない託宣が主であつたけれど、しかしそんな所に興味は無い　何時の間に撮つていたのだろつ、倒れ込んだ《秃鷹》に歩み寄るアステリオスの姿が眼に入れば、記事も確かめずに頁を捲り、捲り、捲つて行き、辿り着くのは最後まで最後白地に黒字と刷り込まれた、『未來のプロメテウス』の頁である。

単彩と描かれた扉絵は、何時もの少女も居なければ正方形も存在しない、ただ焰だけが描かれたものであり、相変わらずの流暢な筆使いを一頻り堪能してから、さて、あれからどうなつただろつか、とヴィクターは、打ち刻まれた文字へと眼を落として行く。

自分でも不思議ではあつたが過去の号を取り寄せる程にのめり込み、すっかり愛読書と化していたこの作品も、気付けば佳境に突入していた　前回の挿話では、最初期よりその存在を仄めかせつつも一向に姿を見せなかつた、全ての竜を司る王テュポンが遂に現れ、その圧倒的な力で帝都を壊滅状態に貶めるといふ絶望的な流れの中、我等が主人公アンリ・カンデラがその正体を、自分こそが光の巨神アステリオスである事を恋人に打ち明ける、正にその瞬間までが描かれており、実に良い所で寸止め状態にあつていれば、今か、今かと、最新号が出るのを彼は待ち遠しにしていたのである。

そうして声も無くと読み始めれば、止まっていた時は動き出し、恋人は、扉から物語へと入っていった少女は、一瞬の間を開けてから微笑みを浮かべると、知っていたわ、とアンリに取つては意外なヴィクターに取つては予想通りの台詞を漏らして、彼の口元をにや付かせると共に、文字を追う速度を早めさせ　脚元にくんくんと金属質の固い感触が触れて来たのは、それから暫くしてであり、ヴィクターは雑誌を脇に、視線を向けた。

そこに居たのは、一匹の、いや一機の子犬型自動機械だった。光沢のある銀色の外殻で意匠化した頭部と四肢が覆われている様子は何処か覚えのあるもので、向けられる紅い単眼と揺れ動く尻尾を見詰めながら、はて何処だったろうかと彼が首を傾げた時、

「ヴィクターっ」

そう己が名を呼ばれて顔を上げるや、こちらに寄って来る一人の女性と対面する。

思わず、声を出したのは、ヴィクターと彼女、両方共だった

何処にでも居そうな 実際この広場にも同型がいる 愛玩機械

だけでは解らなかったが、女性の驚きに開かれた濃褐色の瞳ブラウンと向き合えば、この出会いが再会であるのは自明の理であり、

「貴方……前に、ここで……その、私達を助けてくれた人、ですよ
ね？」

「ああ、うん……その人で間違いは無い、よ……まあ、最後の最後で気絶しちゃったから、助け切ったとは言えないがね……無事だった様で、何よりさ」

「いえそんなっ……こっちこそ、ちゃんとお礼も言え無くて……その節は、ありがとうございました。貴方が居なかったら、一体どうなっていたものか……」

そう言って畏まり、本当にありがとうございました、なんてお礼を述べる女性へ、ヴィクターは慌てて立ち上げれば、いやいやとばかりに頭を振るう。正体を隠しているとは言え、アステリオスでの活動ですら、こんな風に感謝を述べられるはしなかった 皮肉と非難と好奇の言葉ならば、直接でも間接でも、嫌という程貰った

し、あの時は無我夢中で、殆ど何も考えてはいなかっただけに、何とも気恥ずかしい想いばかりが先行するが、それでも嫌等ある訳が無く、ヴィクターは思わず綻ぶ口元を手で覆って、

「所で、何であんた、俺の名前を知ってたんだい？ 確か名乗っちゃいない筈だが」

「え？ ……名前、ですか……？」

「嗚呼そうさ……『ヴィクター』って、さっき言っただけか？」

「あ、ああ……貴方ヴィクター、さんと……すみません、違っんですよ」

「何だつて？」

「この子……この犬の名前が、ヴィクターなんです。奇遇ですね、一緒だなんて」

そして、ヘッ、ヘッ、と舌ベロ代わりに単眼を点滅させているもう一機のヴィクターを抱きかかえながらに返つて来た女性の言葉に、ドクリその心臓を高鳴らせた。

「へえ……そう、なのかい」

等と応えながらも、だがヴィクターの心音は昂つたままで、その鼓動が耳に木霊すれば、それが余計に彼の不安を、動揺を、疑問を誘う。実際何故ここまで心揺り動かされるのか、彼自身不思議だった。別にヴィクターなんて名前、珍しくも何とも無いだろうし、それが犬の模造品に付けられていたって、構うものでも無いというに……

「はい、私の兄も同じ名前で、寧ろそこから……奇遇と言えば、そこも、ですね」

ある意味では、この時点で何か察していたのかもしれない。そうヴィクターが、自省に耽っている間にも、女性は言葉の先を紡いで行く。銀色に煌く毛並みを撫で摩りながら子犬を見守るその視線は、何処か遠く、別の何か、或いは誰かを見詰めていて、

「……そこ？」

「貴方の見た目、ですよ。最初に会った時、ちょっとだけ驚きました、余りに兄そっくりだったんですから……おかしいですよ。眼の色が違いますし、髭だつて生えてなかったですし……別に外見なんて、幾らでも変えられたりするっていうのに……」

「それはまた……聞いて良いか解ないけど、その兄さん、っていうのは、今？」

波打つ黒い髪の前で、印象的な光を帯びた瞳に招かれた彼は、自身より眼を離しつつ、そう彼女へと問い掛ける。ドクリドクリと、血潮の寄せる音を背景に、意味も定かでないこの不安定さから少しでも逃れようと、顎鬚へとそつと掌を寄せながら、

「あ、や、別に死んだりなんてして無いですから、ご心配無く……
筈、ですけどね。良く解らないんですよ、数年前にエル＝ゼノを飛
び出して、それっきりなんで……」

「^{ボリス}企都を、飛び出した？」

「ええ。全く困った兄で……俺はこんな一つの企業になんて縛られ
ない、^{コスモポリタン}世界市民になつてやるんだあ、つて突然言い出して……あの、
私、何か気に障る事を？」

「いや、そういう訳じゃないさ……ただちょっと……腑に墮ちた、
ものでね、」

そこで示された答えは、問い自体適当な、誤魔化しあつてのもの
だったのに、意外や意外、ヴィクターの内面に深く合致する代物で
^{ボリス}企都を出る、そういう選択もあるのかと、彼は密かに、眼から
鱗を落とした。《禿鷹》の件が消化不良であつた所為か、そんな考
えに至りもしなかったけれど、だが別に、エル＝ゼノが唯一無二の
都市　世界である筈が無いのだし、外への扉だつて閉ざされてい
る訳では無いのである。行こうと思えば何時だつて行けるのだ、此
処以外の何処かの場所へ　成程成程、と彼は独り、そう唸り声を
漏らす。気が付けば潮騒は遠く、彼方へと引いていけば、ヴィクタ
ーはしたりと頷いて、

「……そうだな。《禿鷹》ももう捕まつたんだ……君の兄さんを真
似たつていい、か」

「……ハゲ、タカ？　……何ですか、それ？」

そして転機が、驚愕が、稲妻となつて彼の身を貫いた。

「……え？」

「あ……えっと、すみません、変な事を言っちゃつて……」

「いやいや全く、変じゃないよ……だが、ちょっと教えて欲しい、
んだがね……君は《禿鷹》を知らないのかい？　鳥の事じゃなくて

……いや、確かに鳥の事ではあるんだが……その殺人鬼の事だよ。
十三人もの心燈を砕いたつていう……今、話題の……」

「あの……そう、ですね。私が世間に疎いからかもしれないですけ

ど……でも……はい、聞いた事無いです。そんな恐ろしい犯罪者が……話題、なんですか？」

「……そういう事になっている……らしいね」

少なくとも俺が聞いた限りでは、とヴィクターは、不安げにこちらを見る女性を見返しながら、唇一文字とそう付け加える　怒涛の如く心臓が脈打ちを再開するのが自分でも解ったけれど、どうした訳か、頭の中は異様なまでに冴え渡っており、彼女の返事も、仔細無く受け取る事が出来れば、彼は目覚めてからこれまでの記憶を思い起こす　決して短い歳月で無ければ、それは多岐に渡ったけれど、だが要点は一つに纏める事が出来た。

ありとあらゆるものへ烙印された、とある記号に

それが連想させずには居られない、とある個人に

「あ、あの……ヴィクター……さん？　どう、されましたか？」

「……ん、いや別に、何でも……そういえば君の名前、まだ聞いていなかったね？」

「え？　あ、ああ、はい、メアリと言います、が……」

「……メアリ、ね……嗚呼メアリ、こちらからも感謝するよ。君のお陰で色々腑に堕ちた……堕ち始めた、って所かな？　まだまだ良く解ってはいないんだが……でも、目標というか目的というか……指針は見えたよ。ありがとう、本当に君のお陰さ」

「はあ……どう、いたしまして？」

「いや全く……それじゃ俺はそろそろ行くよ。御機嫌ようメアリ？」

「あ、はい……御機嫌ようヴィクターさん」

そうして覗き込まれる茶色の瞳のその奥に、感情を失った自分自身の顔が映っていれば、ヴィクターはにやりと笑みを浮かべながらけれど翡翠ヒスイの眼まではどうしても変わらなくて　読みかけの

《クロウⅡカサス》を棒と丸め、大通りへ向けて歩き出し、

「と、そうそうもう一つだけ、聞きたい事があったんだが、いいかな？」

「？　……ええ、はい、どうぞ？」

その途中でぐるり振り返り、不思議そうに視線を送っていたもう一人のメアリと、合わせて尻尾を振るっているもう一機のヴィクターを見返してから、彼はこんな事を尋ねて見た　何故かは知らないが尋ねなくてはならない、そう感じた問い掛けを……

「ヴィクター……君の兄さんの方のヴィクター、だがね……眼の色が違うって、メアリ、彼も君と同じ眼をしていたのかな？　その、君みたいな琥珀色コハクの瞳を……」

？

・何か私に出来る事は？ と天の主は微笑んだ

……もつと高く飛び上テイク・ミー・ハイクがれ その想いを胸に、アンリはこれまで戦つて来た。

けれど彼は知らなかったのである

高く飛べば飛ぶ程に、重力の鎖は、太陽の網は、情けを忘れて行く事を。

業火が波と成つて天を、地を覆い尽くした時、彼はそれを思い知った。

そして火の神も味わつたという、永い永い後悔の時が訪れた

「J・O＝ネルレラク 『未来のプロメテウス』 『そして子等われらが此処に居る」

？

やがて家々の向こう、地平線の彼方へと太陽が沈み始める時間、

電灯が入られるにはまだ早いけれど、星々と心燈バイアが輝きを増させるには調度良い頃合い、昼と夜との狭間にて、ヴィクター・ナイトは独り自動二輪オートサイクルを駆り、エル＝ゼノ企都ボリスを直走っていた。

正確に言つと、彼は二輪を駆つてはいない それに搭載された算譜機械コンピュータは、それ自体を駆り手と認め、定められた目的地へ向けて、ヴィクターを運んでいる。

その漆黒の車体が、座の空いた側車等サイド無い様に、筐の如き車輦と車輦の間を滑らかに抜けて行く間、彼はその身を前傾と預けつつ、片手で名前ばかりの操縦卓ハンドルを、片手で名前通りの携帯端末モバイルを握り締め、ポオンポオンと、親指のみを使って打刻して行く。

その並び立てられた譜号コードが示すのは、基本にして中心である音声通信であり、そしてヴィクターが呼び出そうとしているのは、本来なら側車サイドに乗っていても可笑しくはない存在、彼の侍女の方のメア

りで　もう一人のメアリとの殆ど一方的に有意義な会合を済ませた彼は、そのまま即座に自動二輪オートサイクルを呼び寄せ、その上へと跨ったのである。

今頃彼女は、家で独り、夕食の支度を　一度だけ見てしまった所では、中空に投影された設計図を元に、諸機具デヴァイスを駆使しながら何種類もの合成材食を煮たり切ったりと、加工　している事だろう。不甲斐無い主人の為に　その工程がどのようなものであれ、その結果がどのようなものであれ、事と次第に寄っては、全て徒労に終わってしまうと考えると、ヴィクターは申し訳無い気持ちで一杯となるが、だが、それで躊躇するつもりは毛頭無く　今からの会話如何によつては、その気持ち自体が無意味に終わる事だろう。

吹き抜ける風に黒髪を流しながら、そうならない事を祈って、彼は譜号コードを打ち終えた　カチ、と引鉄を引き、決定を示せば、トゥルルルと呼出音が鳴り始めて　直ぐに、カチヤンと、あちらの決定音が聞こえてくれば、凜とした鈴の音がそれに続き……

？

お電話ありがとうございます、エルⅡゼノ・サンドアイズ社共同製、汎隸人型自動機械オートマートン、型式番号【²⁵⁰²？】“メアリ”です……お名前と、ご用件をどうぞ……

……もしかしくとも、毎度その台詞を聞かされるのかい？
電話した身は……

ええ勿論、その様に算譜プログラムされておりますが故……この番号は始めてですが良く知っています……ヴィクター様ですね。如何されましたか、音声通信なんて……風が耳障りですね、まさか今車上で
すか？　警邏隊に見られても知りませんよ……

そういう君の方こそ、キィキィキュラキュラ喧しいね……それに、今更警邏隊に見られた所で、何だって言うんだい。これまで散々厄介になつてきたじゃないか……

アステリオスの姿では、ですね……それで、如何されましたか……

その中身が俺なんだぜ、と、悪いがね、ちょっと今日の帰りは遅くなりそうだ。下手をすれば、戻つて来ないかも、だから、夕飯の製造はしないでいいよメアリ……

……それはまた……一体何処へ参られるのです……

アクロス
本社楼だよ……エルⅡゼノの……

……何の為にですか？ 事件は終わった筈なのに……

それは、っと、危ない……そうだな……《禿鷹》の……真偽を確かめたいのさ……勘違いかもしれないが、どうも、まだ終わつてなかつたみたい、なんでね……

……

……知っていたかな？

何を仰られる……言つたでは無いですが、貴方は《禿鷹》を仕留めた、と……

けれどさっきは黙りこくつて……そんな気がしたもので……

オートマツン
自動機械に期待する事ではありませんよ、ヴィクター様……

さあ、良く解からん……だが、前はもつと反応したじゃないかい……君やら誰やらの言い方をするならば、ね、そういう風に算譜されているものだと思つてたが……

……

……実際の所、教えて欲しいんだよなメアリ……

……何を、でしょうか……

いや、何、君は一体何処まで知つていた……知つているのか
なと……

……

……言つちゃうのも何だが、沈黙は金だぜ、メアリ……

……申し訳ございません、ヴィクター様……

いやいいさ……それだけで充分過ぎる答えだからな……フラ
ンクが言つてたつけ、外側は別の企業が造つたと……内側は、つま
り逆、つて事なんだろう、さ……

……

……まあ、そういう事で……悪かったね、手間取らせて……
それじゃ……

……ヴィクター様、少々お待ちを……

と……何かなメアリ……

……一つだけ……一つだけ、貴方に伝えておかねばならない
事があります……今更無駄かもしれませんが、しかしこれだけはど
うしても……かつて貴方が犯した大罪……貴方が囚われるに至った
所以の、その詳細です……

それ、かい……恥ずかしいから思い出したくも無いのだが、
ね……

酩酊の部分だけを上げれば、そう思われても無理は無いでし
よう……ですが、それはあくまでも間接的なもの……直接的には、
別の理由があつたと聞いております……貴方はその、ある議題に置
いて被害者と激しい口論になった拳句、手を掛けたのです……

ある、議題……

オートマ^{トン}ン
自動機械に対する取り扱いの是非……そう伺っております、
ヴィクター様……

嗚呼……嗚呼、成、程……そういう……はは、俺らしいな、
全く……

……以上です……お手間をお掛けして、申し訳ありませんで
した……夕飯は、完成致してテーブルの上に……昔懐かしく高周波
加熱^{チン}処理して召し上がりください……

いいや、ありがとうメアリ……これでまた一つ、腑に堕ちた

よ……夕飯も、ね……後で必ず頂くさ。ともあれこれで……君の前途に、灯が在らん事を……

貴方の前途にも……どういたしまして、ヴィクター様……ご武運を……

？

ご武運を　風切り音が耳に喧しく飛び込む中、確かにメアリがそう言うのを聞いたヴィクター・ナイトは、苦い笑みと共に彼女との会話を終えて　それが良い方に傾いたのか、悪い方に傾いたのか、この時点では何とも言えなかったけれど、しかし少なくとも、悪い気はせず、無論、そう思わせる為の言葉を算譜機械が吐かせた、なんて言う事も出来るだろうが　携帯端末を仕舞い込むと、自動二輪自身が握っていた手綱を折角だからと貰い受け、奏でられる抗議音を聞き流しながらにその速度を自分と機械の限界まで高める。

そうして徐々に、徐々に上がり始める快楽の歓声を二輪の声と共に後ろへと置き去りにし、繁華帯から犇く摩天楼郡のお膝元へとやってくる、彼はエル＝ゼノの本社楼、人気の途絶えたこの都市の中枢へと辿り着き　巡り合わせの所為だろうけれど、こうまで誰にも逢わないと、本当にここに社員が居るのかと疑わしくなってくる　そこで、男前な肉体をこれでもかと晒しているエル＝ゼノ社の守護企神と共に、理想的造形に模られた金髪碧眼の自動受付嬢に出迎えられ、彼女の声が自身の侍女よりも鼓膜に心地良い、だからこそ余計に違和を感じさせるものである事を、その腰から下が脚では無く、ある種の椅子と一体になっている事を、そして彼女が根差している基部の先にあるものの事を、更に目当ての人物が己の頭上に居ない事をヴィクターは知った　その居場所も含めて。

そこで幾何かの時を過ごした後、本社楼を飛び出せば、進む道は元来た道、無意味と過ぎ去った繁華帯の一角で、辿り着いた場所で

すら一度通りがかつたものと来れば、ヴィクターは思わず、もう一度苦い笑みを漏らすと　何時もこうなるんだという想いが突如振って湧いて来るが、何時が何時かなんて定かで無いままに　自動オートサイクル二輪を小脇へと止めた。

マウント・パルナサス

大通り沿いに建てられたその小粋な喫茶店カフェの、店前に並ぶテラスが一つに、フランク・レイニーは居た　場所が場所なら、最初に通った時に気付いても良さそうだったが、しかし以前見た時と違う背格好であれば解らなかつたのも仕方が無く、だが本社楼アクロスを経た後ならば、その姿も一目瞭然の代物であり　橙色と輝く斜陽に照らされた日除け傘の元、悠然と座って珈琲を啜っているフランクの外見は、彼の守護企神マスコットに瓜二つのものであつた。

勿論その縮尺は人間大に合わせられていたし、一糸纏わぬ姿である筈も無かつたけれど（それに寄つてヴィクターが関心と輕蔑を同時に抱いた、あの股の間の一物が確認出来なかつたのは、幸いと言ふべきか何というか）、この企都ホリスの豊穰具合を指し示す様に生い茂つた黄金の髪と黄金の髭、白い、余りにも白い所為で盲てしまいそうな紳士服に包まれた恰幅の良い体軀は、あの無銘の神そのものであり、それが余りに似ている為、石像は逆にこの姿を象つたものではないかとヴィクターは思った程である。違ふ点と言えば、体毛を金と、瞳を青と、そして胸部を橙とする、かつて見たのと同じ色彩がそこに加えられている点と、そして柔和な表情だろうか　守護マス企神コットがどんな表情をしていたか、ちゃんと覚えてはいなかつたけれど、こんな人懐っこい、穏やかな笑みでは無かつた筈　或いは、そんな風には造られてなかつた筈　そうヴィクターは思い返しなから、その笑顔に誘われる様にして脚の長いテーブルへ歩み寄り、「やあフランク。あんた煙草持つてないかい？　出来たらそうだな、点火器ライターも一緒に」

言いつつ、相手が応えるよりも早くにその対岸の椅子を引いて、素早くよいしょと腰を下ろせば、返つて来たのは、微塵も曇らない

父祖的な余裕を称えた笑いと、何時か携帯端末^{モバイル}越しに聞いたのと同じ、老いて掠れた、だが同時に安心と力強さを感じさせる声であり、「久しぶりに逢ったというのに、随分な物言いだな、ヴィクター・ナイト。君が煙草呑みなのは知っていたが、ここまでとは、ね……メアリから聞いていたんじゃないかな？ 二十年前に、この企都^{ボリス}は禁煙にしたんだよ、一部を除いて、ね」

対するヴィクターは、右の眉と左の口端を釣り上げながらに、翡翠^{スィ}の瞳を向けて、

「その一部が、あんた周辺じゃないかな、なんて思ったものでね、何と無くだけど……それに、確か俺が聞いた限りだと、十四年前だった筈だがね、禁煙になったのは」

「君も失礼な奴だなあ。私は煙草なんて吸わないよ、健康の大敵だからね。一部というのは研究施設さ。あの煙が如何に人体に、或いは機械に悪影響を与えるかを調べる為の、ね……まあ、だからちょっとの間違え位、多めに見てくれよヴィクター」

「そうだな……この地で禁じられている、それだけでもう一杯っちや一杯だ」

そうして青金剛の瞳と交われば、ついとフランクが目線逸らしたのに誘われて、彼が見ている方、今しも太陽が沈んで行く企都^{ボリス}の西へと視線を向ける 繁華帯^{アコラ}の中と言ってもどちらかと言えば中央寄りの、そして南東寄りの場所の為か、宴の音は未だ遠く、聞こえて来るのは帰途を目指すもの達の足音であり駆動音であり、そして眼前に広がる風景も、落日の光に染まった紫空に摩天楼^{ビルディング}郡の影であったならば、ヴィクターの胸中に宿るのは何処か物哀しく、何処か落ち着いた感覚で これからする事になる話題、そして次第に寄つてはする事になるだろう行動には似付かわしくないな、と彼は苦味を一層深めると、注文を伺いに来た美形の給仕^{オート} 給仕型の自動機械^{マトン}を丁重に送り返しつつ、顔半分を右掌で覆いながら、フランクの方を見るとも無く、ところで、とその唇を先に開いて、

「フランク……一つ、いや、多分幾つか、かな？ 聞きたい事がある

るんだが……」

「それがわざわざ訪れた理由かね……良いだろうヴィクター。何を聞きたいかな？」

同じく視線を夕暮れに合わせたまま、ゆったりと頬杖を付き付きフランクがそう返せば、もう一度だけ、ちらり視線を流してから、ヴィクターはその言葉の先を紡いで行き、

「……《禿鷹》についだよ、フランク。俺が捉えた、あの男に関して、さ……」

「嗚呼またそれが……存外しつこいね、君も。一体何が気になるって言うんだい？」

「それこそ色々だよ……例えばそうだな……結局あの男は誰だったのか、とか……」

「その事だったら、とつくの昔に本人から聞き出した。アレの正体は、ハルポクラテスの企業密偵だったよ……あそことは、それなりに長い付き合いでね、色々と因縁もある。君が活躍した企都戦争でかなり痛手を与えてやった筈だが、懲りていなかったらしい。怪人物による内側からの秩序崩壊……それが、アレの狙いだった、という訳だよヴィクター」

「成程……ね。ちゃんと調べはついていたという訳だな」

「あれだけの時間をくれればね、当たり前というものだ。捕まえてしまえば、口を割らせる方法なんて幾らでもあるのだから……割られた口を造る方法も同様にさ」

「……嘘……だな」

「……何の事が、ね？」

辿り着いた台詞に一瞬の沈黙が降りれば、ヴィクターは掌を離して真顔を浮かべて、

「《禿鷹》の事だよフランク……もういい加減に茶番は止そうぜ。あんたが調べたって言うなら俺も調べたんだ……誰もそんな輩知らないし、思えばどの紙面にも載ってなかった……あんたが言った様な事件だったら、当然掲載されて然るべきだって言うのに、さ……」

一つだけあっても、あの最後の一夜だけ、アステリオスと一緒にの時間だけ、だが、メインはこっちの方でね……《クロウ・カサス》なんて酷いものさ、本人も読んでるって言うのに」

そして彼は丸められた雑誌マガジンを懐から取り出すと、広げながら叩き付ける様に置いたのだが、フランクはしかし、一切その顔色を変える事無く穏やかに笑みを浮かべて

「嗚呼成程、それならば説明出来るよヴィクター……戒厳令という奴さ。エル・ゼノボリス企都の全住人に置ける死亡率というのを知っている、これが容易に口に出して良いものではないなんて、簡単に理解出来る筈だよ……その先にある恐慌を、ハルポクラテスの策略を考えれば、騒がない方が得策だ、そうだろう？ 無論の事、我々上レネス位層は知っていて然るべきだがね……上に立つ者は、下々の分まで悩むものなのだよヴィクター」

「そう、だな……確かに、そういう風に言う事も出来るね……」

「そうだろう、そうだろう……では、この話もここで終わりと、」
「出来たら良かったのだが、ね、フランク……生憎と、俺はその先を知っているのさ」

「……ほう……その先、とは？」

「……あんたん社ちの地下にあつた《禿鷹》の抜け殻の事だよ、フランク」

「……ほう……」

けれどヴィクターも怯まずにそう返すならば、遂にエル・ゼノの長は唇を嚙むと聞き役に徹する構えを見せ、それでも表情はそのままに、彼は今を機会と畳み掛ける、

「ここへ来る前に本社楼アクロスへ寄つたのさ……オリンピア、って言うんだってな、あの受付。良い娘だ。あんたの名前を出した上で《禿鷹》を見たいと言ったら、簡単に昇降機エレベータを降ろしてくれた……もしかしたら、そういう風にしてくれたのはあんたなのかもしれないが、ね……お陰でちゃんと見る事が出来たよ、前は警邏隊のあいつに邪魔されたから……」

そんな脳裏に浮かび上がるのは、つい先程に見た、忘れ得ぬ光景であつた。

頭上では無く、脚元に降りて行つた果てにヴィクターは、あの時、見る事が叶わなかつた《秃鷹》の正体を知つたのである。自身が籠つていた空間とはまるで違ふ、薄暗い廊下を抜けた先、研究とその頭文字に付く資料と資材が堆く積まれた倉庫の中、心燈ハリアを引っこ抜かれた状態で、彼は幾つもの部品に腑分けされていた。一切の衣服が、装飾が取り外されていれば右手も同様と別に保管され、そして猛禽の名をその身に齎オスしていた仮面もまた消えて、枯れた樹木の様に節ノ木ス立ツつた生体の上に収まつていた頭部は、頭巾でかさ増しされていた為オスだろう、実際は驚く程小さく、両の手に収まつてしまふ程度で。その顔は醜くひしゃげた老人のものであれば、浮かばせられた表情は悲痛以外の何者でも無く、琥珀色コハクの瞳だけが場違いなまでに爛々と輝いていて。だがそれでも、双眸の中央、眉と眉の間に刻まれた印章と比べれば、別段驚くには値しなかつた。良く見れば瞳だけじゃなく、部位と部位の間、接合部にも同じものが黒く熱く押印されているその印は、誰が、何が見間違える事があるだろう、普段であれば黄金と並ぶ、エル＝ゼノの

？

「いやはや全く、仕様の無い娘だなあ、オリンピックもつ。そんなに簡単に見せてしまつては、面白味も何も無いって言うのに……どうも新型に更新する必要がある様だな」

「……言うべき点はそこじゃあ無いと思うが、ね……」

そこまで語つた所で、破顔一笑と、ぴしゃり額を叩いて噴出すフランク・レイニーの姿に、ヴィクター・ナイトは思わず眼を向けてしまつて。まだ陽の光が地上を照らしているというのに薄ら寒く感じるのは、隣に座る老人（外見的にも内面的にも、その通りの）の正気に対して疑念が過ぎつたからか。けれど咳払い一つして気

を取り戻せば、彼は再び唇を開き、

「あんたは言った……奴の正体は解らない、と。ついさっきは、他の企業からの遣いだ、とも……だが、実際はそうじゃなかった。《秃鷹》はここで造られた……この企都^{ポリス}の中で、ご丁寧にもそれを証明する印まで付けられて……あつたのかどうか、誰も知らない事件を起こした、なんて言われて……何がハルポクラテスだよ笑わせる……はつきりさせようじゃないか、フランク社長？ 俺が見てきた事が、感じて来た事が正しければ、答えは一つ……《秃鷹》なんて居なかった。そうじゃあ無いのかい？ ええ？」

そこで暫しの間が入り込むと、今度はフランクが口を開ける手番であり、

「如何にも、上手く纏めてくれるねヴィクター……“《秃鷹》なんて居なかった”……そう、その通り。忌むべき殺人鬼なんて居やしなかったのさつ、この世界の何処にもっ」

「……随分愉快に言うんだな？ フランク……」

「そりやそうだろう。つまり君が心悩ませていた十三人の犠牲者なんてものも、最初から居なかった訳だよ？ これ程喜ばしい事も、まあ昨今余り無いんじゃないかな」

「……まあ……だが、そこは問題じゃ無いんじゃないかい？」

「嗚呼確かにそこは問題では無いな。もう一人もはつきりさせて置くべきだからね」

「……何だつて？」

「君の事だよ、ヴィクター……^{スポンサー}提供者として一言付けておくと、発狂するかもしれないから心して聞いてくれ給え……《秃鷹》が、そしてその《犠牲者》がそうである様に、《ヴィクター・ナイト》なる人間もまた存在しないんだよ、ヴィクター・ナイト」

そうしてヴィクターが、口を閉ざす手番がやって来た。

手の甲で汗を拭い拭い、彼は物々しい警告を発しつつも笑みを崩さないフランクの方へ、おずおずと顔を向けた。じい、と半目になつて見詰めつつ、うつすらと開かれた唇へ指に挟んだ煙草の吸口を

近付け、ようとして、そんなもの持っていないじゃないかと直ぐに
気付き、仕方無しと無色透明な吐息を漏らし　それからたっぷり
時間を掛けて言葉を探し、

「……俺が……存在しない……？」

漸く出て来たそれが、相手の台詞の繰り返しである事を知り、機
嫌悪く舌打ちして、

「そつだよヴィクター、ヴィクター・ナイト……正確に言うならば、
過去形だな……あの日、あの廃屋で目覚めるまでは、君は存在しな
かった。君は螺鈿細工……ある種の芸術品であり、そして新手の自
動機械なのさヴィクター。君の外見、名前、歴史、趣向、そして心
燈の一切は、我々エル＝ゼノ社の技術陣が用意、設定したものだか
らねっ……と、言つては見たものの、何だか反応がいまいちだ
なあ。そんな反復言語なんかじゃなく、鬼気迫る咆哮を期待してい
たのだが……何だい、驚き過ぎて言葉も無いのかね？」

同じ様な事を述べるフランクの笑みに始めて陰が差す　とは言
え、それは、軽く眉が吊り上げられる程度のものだったが　のを
眼にし、ヴィクターは、自分が言う程動揺していないという事実を
知った　いや、確かに驚いているにはいるのだけれど、どうやら
思う所があつたらしい、やっぱりなあ、と感じる部分が、頭か胸の
片隅にあり、

「半分は、ね。でも半分は違ふ……何故かな、きつとそうじゃない
かと思つてたんだ」

「詰まらないなヴィクター……手掛かりが無かつた訳じゃないから、
良いのだがね」

「そう言うなつて、俺もどうかと考へてるんだから……まあそれ自
体はどうでもいいかな。問題は……重要な部分は、やっぱり別だぜ
フランク・レイニー・エル＝ゼノ社長」

その様に意外性に乏しかつたからこそヴィクターは、自嘲気味な
微笑を浮かべてから直ぐにその表情を真顔と戻し　フランクへ、
企業の、この企都の長へ、そして恐らくは一連の事と次第の黒幕へ

と、睨みを効かせた緑の瞳を鋭く向けて、

「ほう……その問題とやらを、教えてくれるかな？ ヴィクター」

「問題は……動機だよ。何故こんな七面倒臭い事を企てたのか……その所が、俺の正体とやら以上に、不可解だね。掻い摘んで教えてくれると、助かるんだが、な」

「成程……確かに、そこもはつきりさせて置かなくてはならないな」
しかしフランクは然して気にする様子も無く、くい、っとすつかり冷めてしまっていた珈琲を一息で飲み干しカップを置くと、空いた手で懷の中を探りつつ、

「良いだろう、聞き給え……大きく分けてその理由は三つだ、ヴィクター。一つは至極簡単なもの……エンターテインメント愉快痛快という奴さ。前に言ったかもしれないが、我々企業は市民の為にあらゆるものを提供していて、その内の一つには娯楽もまた含まれている……私利私欲に耽る悪漢共に憤然と立ち向かう謎の戦士……最新鋭の装備を身に付け切った張ったを繰り返す様は、興行としてなかなか素敵じゃないかい……いや、ここは素敵と言い切ろう、今日まで君の、アステリオスの話題が登らない日は無かったからね。様式が完璧なら、君の演技も見事なもの、と、警邏隊も形無しの活躍には、私も胸が踊ったものさ。ちよつとばかり最終回が微妙ではあったが……続きは劇場で、という所かねえ」

そう怒涛の如く一気に捲し立てると、彼はぱちり片目を瞑ってから、すつと上着より彼用の携帯端末モバイルを取り出し　その先端を、俄に輝き出した月へと差し向けて、

「二つ目は……はは、こっちの方が簡単かもしれないが、技術開発……科学の発展の為、という奴だね。知つての通り、かどつかは知らないが進歩は必要から産まれるものだよヴィクター……雨が降るから、人は傘を産み出した……それが進んで行くと、面白い事に何時か、何処かの段階で、必要と欲求は裏返し、新たな展望が見えて来る。ほら、丁度こんな具合に、傘を欲するから、人は雨を産み出すのさ……と……おや？」

カチリカチリと、ずらり刻まれた数字を押していたけれど、周囲には何の変化も無く　何やってるんだい、とヴィクターは眉間に皺を寄せて　しかしてそれも数分の事であれば、何処か上の方より雷鳴が聞こえ、何時の間にやら暗雲が立ち込めると、やにわに月を、星々を、そして太陽を隠す程度にまで育ち始め　パリパリと、雫が落ち出した、と感じた数秒後には、豪雨がエルゼノを襲っていた。

ヴィクターとフランクを覆っている日傘は雨傘となって二人を守るが、予報にも無かった突然の天候変化に対応出来た市民は、機械は少なく、彼方此方で驚きの声と音が上がり出せば、銘々それぞれの早足で帰途を進んで行く　水滴の幕が視界を覆う中、常よりも一足早く灯された電灯越しに見出せるその姿は、ただの輪郭であり影であり、そこではもう心燈パイアの輝きも、それ以外の輝きも見分けが付かず　言葉を交わす暇も無ければ、縦令上げた所で、水音に、風音に掻き消されてしまつて　何だろう、ヴィクターは、その光景に妙な疼きを覚えたのだが、しかしフランクは特に感じる所も無かつた様で、

「嗚呼良かった出来た出来た……と、こういう訳で、今の我々にとつては、天候すら管理、運営の対象なのだよ……尤も、まだまだ開発途中なのは、否めないがね。反応は悪いし、晴れから雨以外の変更是効かないし、それに一度操作しちゃうと、人口でも天然でも、暫く雨が降らせられなくて……多分、後で託宣告知省ニユースステーションの連中にどやされるだろうな……まあ、始まりなんて大概そんなもの。失敗は成功の母だから、どんどん失敗を産まなくちゃだし……それを言ったら、《禿鷹》も本当に失敗だったな。あんなに簡単に退場するとは思ってなかったんだよ……調子に乗って、君を強くさせ過ぎた。今、何処の企業も、持てる戦場は自分の領土位ボリスだから、大事に使わないと行けないのに、ね」

そして告げられる台詞は、表情が変わらないだけに神経を逆なでしてくれるものであり　降り注ぐ雨音と共に耳に入る言葉に、ヴ

イクターは自身の表情を険しくさせて、

「……それで？　まだ疑問は残ったままなんだが……三つ目ってのは何なんだい？」

そう先を促すならば、モバイル携帯端末を仕舞い込みつつ、フランクは頷いて、

「良いだろう、三つ目か……これが単純な様で複雑で、そして全ての根底で、そもそもは、これがあつたからこそに、計画が建てられていった訳なのだが……」

「前置きはいいつての……早く先を言ったらどうだ」

「そう急かすな、物事には順序というものがあるのだから……三つ目の理由はね、ヴィクター、知的欲求の充実……我々は知りたかつたのさ……バイア心燈について」

「……読めないね……バイア心燈の、一体何を、なんだ？」

「バイア心燈……それは命の灯火であり、究極の本質、絶対の真理でもある……が、それだけに、バイア心燈は謎で一杯なんだ。もうどうやって手に入れたのか、ちゃんと覚えていない程度の昔に手に入れた筈なのに、知らない事がまるで多すぎる……例えばバイア心燈は何処から生まれ、そして何処へと消えるのか……バイア心燈を産み出す事は可能なのか否か、もし可能とすればどうやって、そしてその素材は何なのか……等等。他にも細かく数えて行けば、ちよつとうんざりしてしまう程にあるのだが……今回我々が取り上げたのは、その中でも比較的安易で、それでいて重要な……バイア心燈と肉体に置ける記憶の関係性だったんだよヴィクター」

「……バイア心燈と肉体に置ける記憶の関係性？」

そこで示された言葉に再び鸚鵡返しと呟いてしまい、ますます持つて顔を強ばらせるヴィクターへ向けて、嗚呼そうだよとフランクは更に頷き頷き、笑みを深めて行き、

「記憶というものがバイア心燈の中に蓄積されている事位、我々は経験で知っている……で無ければ器を代える事なんて出来無いから、ね……だがそれと同時に、どうやら器の方にも記憶が残っていて、それ

に影響されるという事も知っていた。それは神経の中樞たる脳や算譜^{シミュラ}機械を使い回した時に顕著だったが、それ以外でも多かれ少なかれあるもので……既視感、という奴だね。そこで我々は、こう思ったのさ、実際肉体は、心燈^{バイア}に対してどの程度影響するのか、或いはしないのか……ちょっと試しに、やってみようじゃないか、と」

その深みが頂点に達した時　フランクはすつくと手を上げて、ヴィクターを、心燈^{バイア}を指差しながらに、こう言ったのである　だからこそ、君が選ばれたのだ、と……

「俺、が？」

ヴィクターは突き付けられた指先に、疼くに続く昂りを感じたドクリドクリという鼓動が、降り注がれる雫を遠くへ追い遣る様に鳴り響けば、ぎゅっと胸元を掴み込み　そんな彼の方へ始めて眼を向けながらフランクは、息子を見る父の顔を浮かべ、

「嗚呼そうだ、君だよヴィクター……我々はその実験の為に、君を、《ヴィクター・ナイト》という存在を造り出したんだ……必要になったのは、純粹無垢な、穢を知らない心燈^{バイア}であり、それとは逆に、嫌という程経験を、そして記憶を積んだ肉体だったが、後者は元より前者がしんどくてね、集めるのに本当に苦労したものさ……まあどちらも捉えられた者達で補えたし……ついでは何だが、人間の発育段階に置いて心燈^{バイア}が何時宿るのか、なんて積年の謎も解明出来たし……そして実験も、見事成功したと言わざるを得ないし、ね。長年育まれて来たものであるかの様に、君は目覚めた時からその肉体を、その脳髓を使いこなしていた……最初に逢って話した時、内心驚いていたよ、君の心燈^{バイア}の実年齢を知っていたから。そこから更に君は、我々の目論見通りになっていってくれた……君の肉体の部分部分となつて一人を構築している十三人の非心燈^{バルバロイ}化者こそは、君が見た犠牲者達でね……無論、あの映像自体は虚偽だけれど、しかし皆が、一度は死を体験しているならば、それは他よりも充分過ぎる動機と、動力を与えてくれ……与え過ぎて《禿鷹》との戦力差が産まれた訳だが、まあ仕方がない。元々アレには負けて貰うのと、

君とは別の形で肉体が心燈^{バイア}に与える影響を……即ちその醜美の影響
だな、そいつを調べる為に、余剰部品で造った器をして貰っていて
ね。結果は一応想定の範囲内だから、かくて君は彼を打ち取り、こ
の企都^{ポリス}で未永く、平和に暮らして行きました、と……言う予定だっ
たのだがなあ……まあ、知ってしまった者は仕方が無いし、これは
これという所だね、脳外科手術^{ロボトミー}がどの様に影響するかというのを見
てみたい所ではあるし……嗚呼、何か質問は？」

そうしてこれが最後と調子良く、それこそ割られた口が如くにフ
ランクが語り出せば、ヴィクターの表情は見る間に消えて硬くなり
漸く終わつたと言う頃には、その顔には苦味だけが、正に仮面
と張り付いていて、そして彼の脳裏には諸々の記憶が、《ヴィクタ
ー・ナイト》として過ぎて来た日々と、明らかにそうでは無い日
々が渾然一体となつて形も取らずに溢れ返り 本当に文字通りの
初夢であつた、あの朝の眠りの光景を、嫌が応も無く蘇らせるので
あれば、嗚呼、とばかりに彼は今度こそ本当に、正真正銘と理解す
る。

即ち 一体全体《禿鷹》とは何者なのであるのか、を……

これが管理、運営の結果と言つて良いのやら、更に激しくなる雨
の様子をちらと見つつ、ヴィクターはそつと立ち上がった。そのま
ま、殆ど一方的に説明しているだけの間も決して崩れはしなかった
笑みを、未だに称え続けているフランクの方へと体を向け、

「……理由が三つだつたら質問も三つだ……どうだい、いいかなフ
ランク……」

「勿論だよヴィクター。さ、遠慮なく言つて聞かせてくれ給え」

「では一つ……あんたが、あんた達が言う所の《バルバロイ》って
のは何なんだ？ 俺の肉体が、心燈^{バイア}が、その継ぎ接ぎ仕様って言
んなら……元になつたつて彼等は、一体どんな人間だつたんだ？

……そしてどんな風に屍体に……部品になつたんだ？」

そしてゆっくりと歩き出す 左手よりも黒ずんだ右手を腰元へ
やりながらに、

「そこから言わなくてはならないか…… まあ何とも意味を多岐にする言葉なら、説明もし難いのだが、端的に述べるなら《我々で無い者》という所だよヴィクター。ならばこそ、どうして彼等の詳細を知っていよう？ 違う者は違う者だ。それ以上でも以下でも無いさ」

「成程ね…… では二つ目、」

「ヴィクター、今ので三つあったんじゃないかな？」

「冗談言うなよ、二つ目は…… メアリだ。彼女は知っていたのか？ その、俺の事を」

「まず訂正させてくれ給え。心燈パイアを持たないメアリを“彼女”と呼ぶのは不適切だ。前にも言ったと思うがね…… その上で答えを言えば、その通りだよヴィクター。アレの役割は君の世話係であり、また同時に記録係でもある。対象を観るのに情報を知らないなんて間抜けは無いからな、その程度は算譜機械コンピュタに収められているよ」

「…… 成程、そう、か…… そうだったかい」

「裏切られた様な気分かな、気の毒に…… 人形なんて愛好する者では無いものを」

「放っておけ、と…… 悪いね、追加でもう一つだ」

子を諭す様に問い掛けに応える これだけ見ても、心燈パイアと肉体の関係とやは往々にして図れそうだったが フランクの元へ、一步、また一步とヴィクターは近付き、円卓を回りつつ、電気仕掛の侍女の姿を思い浮かべ、彼女と過ごした時間を複雑と思い返すが、その中には先程し終えたばかりの、携帯端末モバイル越しの会話もまた含まれており、

「三つが四つに変わる位なら、大した変化では無いよ…… 何かね？ ヴィクター」

「最初の質問にも掛かっているとえば、掛かっているんだが…… 確かあんた、俺の歴史も用意したと言ったね？ 外見と一緒に、と…… つまり、昔はこうだった、なんて言うのは、かつて本当にあったのかい？ 撃墜王とか何とか…… そういうのさ」

「ふむ…… 何を気にするのかと思ったが、そんな所か。答えは、そ

うだよヴィクター…… 本当なら拵えても良かったのだけど、それはそれで手間だし、何よりも勿体無いから、ね……。《ヴィクター・ナイト》としての整合性を考えるなら、使える挿話は使った方が良いと判断したのさ……。脳髄は一つなら、全部が全部とは言わないまでも、しかしある程度受け入れられたんじゃないかな？ その様子では」

「…… 嗚呼全く……。俺らしいな、って、そう思ったものさ」

「言葉の意味が良く解らないが……。何が一体君らしいのかね、ヴィクター」

唇の端釣り上げたままと眉を潜めるフランクに、いいや別にとヴィクターは頭を振るい。一種彼の顔にも微笑みに似たものが浮かび上がるが、直ぐにそれは泡と消えて。そして気が付けば、彼の距離は零に等しく、彼は彼を静かに見下ろした。

緑と青の視線が混じり合い、絡み合い

「…… それじゃ最後の質問だ、フランク？」

「ああ……。それで納得してくれるなら、幾らでも……。何だねヴィクター？」

「…… あんた、もしかしくとも巫山戯てるだろ」

そして一拍の間を置いてからヴィクターが抜き出した黒い筐体は彼の携帯端末であり、既にして譜号が刻み込まれているならば、その形態はお約束の光弾発射の状態で。紅く輝く水晶体が狙うのは、フランクの笑顔で無く、その胸部の心燈の輝きで、

「…… 巫山戯てなんかいないよヴィクター。何時だって私は真剣だ……。そこで聞くが、君の方はどうなのかね？ そんなものを私に向けて……。一体全体どうしたと言うんだ。確かに気に入らない点があるかもしれないが、何、人生なんてそんなものだ……。それ以上に、私は、私達は、君に手を貸してやったじゃ無いか。命を、体を、力を、目的を、金を、立場を、自由を、あまつさえ真実もこうして与えて……。勿論、それは我々の利益の為ではあるが、君にとっても得だったろう？ 私には良く解らないな、ヴィクター。何が不

満なんだい……何を与えたら、君は満足という事を知るのかな？」
「……そう改めて言われると、ちよつと困るし……きつとこれが俺の勝手な言い分だつてえのは解っているんだが……そうだな、フランク。はつきり言えば、俺はその笑みが気に入らない……何時だつてそうだ……質問を質問で返す事が、悪いつてのも知ってるが、言わせてくれ、最後だから……何であんた、そんな風に笑つてられるんだい？」

無数の糸となつて天から降り注ぐ雫が分厚く暗い布地を築き、二人の姿を、その周囲を、企都ボリスを陰の内へと収める中、ヴィクターはそうフランクへとそう尋ねる　銃口となつた携帯端末モバイルが先は、微動だにする事無く、胸の的へと突き付けながら　鏡を見ずとも看過出来る、自身の強張つた顔に対して、この様な状況にあつても緩んだままの唇を見詰め、

「成程、この笑いが君の氣に障つていたのか……その理由は良く解らないが、しかし悪いね、こればかりはどうにもならないんだ……何年も何年も、努めてそうして来た所為だろう、笑顔以外の表情の造り方を、この心燈バイアは忘れてしまつたんだ……肉体が影響されるという意味で、君という存在の反証になつてしまつてるのは申し訳無いけど、まあ無理なものは無理な訳で、ちよつと諦めてくれると嬉しいかな、ヴィクター？」

そして告げられる返答に、それでも変わらない、いや変えられない笑みに、ヴィクターはふと思つた　あの無銘の神なんかも、きつとこんな表情をしていたのではあるまいか、と　それは虚偽の像で無ければ、笑顔自体、表情自体の事では無く、そこに満ちる空気を、雰囲気の意味しており　或いは長く生きるとはこういう事であるのかもしれない、他者への誠意も思慮も伺えない、何者にも何事にも決して揺らぐ事の無い確とした自我をそこに感じるならば、彼の体は、脳は、心燈バイアは、それを嫌悪せずには居られなくて、

「……そうかいフランク……ありがとう、だつたら、これで終わリだな」

ヴィクターはぐつと指に力を込めて 次の瞬間、その意識は消
失した。

？

こうして長い長い対話 予定調和の質疑応答が、果たしてそう
呼べるかは、甚だ疑わしい所ではあったけれど その末に、全て
何もかもを一音と飲み込む、雨の中の静寂が訪れるならば、携帯端
末を向けたままの姿勢で停止しているヴィクター・ナイトへと、フ
ランク・レイニーは至極残念そうに眉を下げ、だが唇は一層と釣り
上げて、

「真実を知った時、君が反企業^{バルバロイ}的行動に出る事を、社は予想してい
たよヴィクター」

最初からね、と、付け加えるなら、何時の間にか握っていたのは、
先程とは別の携帯^{モバイル}端末で 艶消し済みの黒く細長い外観に「実在^{オン}
／非実在^{オフ}」という二つの紅い打鍵^{キー}しか存在しない、余りに簡素な造
りの端末は、テーブルの下から密かにヴィクターの方へその先端を
向けられており、そしてフランクの親指は「非実在^{オフ}」の方を押して
いて、

「ならばこそ、各部品を調達し、吟味に吟味を重ねてから、さあ
ざ組立の段階になった際、我々は真つ先に手綱と首輪を付けたもの
さ……この赤い打鍵^{キー}をぼちりと押せば、君の器と心^{パイア}燈との繋がりが一瞬で全て断てる様に、ね。君の様な存在を野放しだなんてとんでも無い、こちらこそ今まで馬鹿じゃ無いよ」

彼は、その遠隔^{リモコン}操作具をカップの隣に置くと、とは言え、とふる
り頭を振るい、

「それでも君には良くしてやったつもりだがなあ……ちゃんと人間
扱いしているし、選択肢だって包み隠さず提示したっていうのに……
……まさか、この終わりを選ぶとは、ね。想定^{想定}の範囲内ではあるが
……私には不可解だよヴィクター、本当に」

その乱れるという事を知らない、蒼く澄んだ瞳を、ヴィクターの方へと向けるのだが、しかし今のそれは抜け殻に過ぎなければ、返事はおるか反応すら無く、フランクは名残惜しむ様に、思い出を振り返る様に、出来立てほやほやの展示物オブジェを見続ける。

その様子は、ちよつとした異変に気付き、防水皮膜で雨を粉と砕きつつ給仕型自動機械オートマツンが駆け寄つて来ても尚と続けられ、何でも無いよ気にするな、という一言と共に告げられる珈琲のお代わりの為に丁重に戻って行くソレと入れ違う様に、薄紫色の雨傘を手に持った、電気仕掛の侍女が姿を現すまで、何一つと変わらなかった

？

・火の神の導くままに

……鼻孔を擽る芳しい匂い　それが企都^{ボリス}では嗅いだ事の無い、青々と大地に生い茂った草木が発する香りだと、懐かしく思い出すのに数秒を要しながら、呻き呻き瞼を開けると、眼前に広がっていたのは、青と赤の入り混じった薄紫の空であった。

如何なる者の造形だろう、何とも絶妙な具合に雲と月と星々が、天を画布と配置されているならば、その素朴な美しさに、思わず吐息を漏らしてしまい　惚ける心が、これは夕だろうか朝だろうかという些細な、余りに些細な疑問を浮かべると、それに応える様にしてすつと少女の白く整った顔が、紫水晶^{アメジスト}の瞳が、彼の眼の前を覆い尽くし、

『お早う御座います、ヴィクター様…… お加減の程は如何でしょうか？』

そして告げられる鈴とした響きを理解するのにまた数秒を掛けてから、彼は……ヴィクター・ナイトは、あ、と慌ててその上半身を起き上がらせる　そこで解ったのは、今回もまたどうやら服は来ている様だという事であり、その服を纏っている器は、覚えている限り何一つ変わっていない馴染み深い代物であり、少し芯が残りつつも柔らかく温かいと後頭部に感じていたものの正体であり、ここが小高く盛り上がった草原の一角なのだという事と、自身の方位感覚に従って、今が明け方なのだという事であり　あれえ、とヴィクターはまだ熱の籠ったままの髪に、手を伸ばした。そのままの姿勢で首を回すと、黒々とした雨雲と、妙に金ぴかな麦畑に覆われた点々と光灯す灰色の塔と箱の群体が、遙か彼方に見出せて　思わず地表に出来た痘痕と連想すれば、直前の、最後の記憶が蘇り、彼は顎鬚擦り擦り、メアリの方へ振り返って、

「……正直何だか良く解らないな……とりあえずメアリ……無いとは思うが、煙草持っていないかな？　出来たら……ほら、^{ライター}点火器もあると嬉しいんだが……」

自分の中では挨拶の常套句と化した言葉を、精神の落ち着きも兼ねて口に出して見たのだが、しかし侍女は、じつとヴィクターから目を逸らす事無く首肯して見せて、

『そう言われると予見しまして……こちらにご用意しておきました』
白い前垂れのポケットより、白地に金字で『^{イクサ}JUNCUS』と刻まれた掌大の紙筐を取り出すと、驚き固まっている主へ向けて恭しく差し出して、

「……言ってみるもんだなあおい……こんなの、どうやって手に入れたんだ？」

暫しの衝撃から解き放たれたヴィクターは、手を伸ばしてそれを受け取り、手早く、慣れた手付きで封を切った。縦に横にと敷き詰められた紙巻の内の一つをひょいと摘み、その白く輝いて見える巻紙の、端から端へと鼻先を滑らせ、芳香を吸い込む。

得も言われぬ快感が、その背筋を電流とばかりに貫いた。

『^{アクロス}本社楼から貴方を持ち出す際、ついで、と言つては何ですが、一緒に拝借して参りました……未開封とは言え、製造から大分日が経つていれば、味は保証致しかねますけど……貴方の中の喫煙違反者^{バルバロイ}が一人の所持品ですから、口には合いそうですが……』

「吸えるんだったら何だつていいさ……今は、ね……と、^ラ因みに点火器は持つてるんだろ？　煙草だけあつて火が無いなんて、そんな冗談、笑えないぞ」

『ご心配なく……勿論ここに』

思わず笑みを溢れさせながらヴィクターがそう尋ねると、何時もの調子に淡々と、だが今日は何処か熱を感じさせる視線を向けながらにメアリは頷き、もう一方のポケットから今度は真鍮製の^{ライター}点火器を取り出す。その筐体の蓋をパチンと開けて、カチリカチリ、と何とも頼りない手付きで火打を弾けば、彼は今直ぐ代わって遣りたい

衝動に駆られたものだが、折角だからと見守っている間に、その先に小さな炎が灯された。

『どうぞ……』

消えぬ様にと片手を添えてメアリが火を向けてくれると、うむ、と濾過紙^{フィルター}を咥えつつヴィクターは顔を近付けて　一人と一機の視線が、同じ一つの灯火に寄って混じり合うや、ジリジリと焦がされた葉先は熱を移され、紫煙を上げ出し　待ち焦がれた瞬間に瞳を細くさせながら、すうと煙を吸い込めば、肺腑へ染み渡る香ばしくも甘い毒の味に、ヴィクターは、思わず、嗚呼……と嘆息を漏らす。それが肉体の何処に由来するのかは定かで無かったけれど、しかし歓喜は全身に満ち溢れ、彼はぎゅっと目を瞑って、それに浸った。

やがて細胞という細胞がその喜びを享受すると、後からやって来たのは精神の落ち着きであり　うつすらと眼を開けながらに、彼はその唇をそつと開けて、

「……さて……何と無く整理が付いて来たから聞きたいのだが、ね

……メアリ……」

『はい、ヴィクター様……』

「……ごちゃごちゃ言つのも面倒だ、一言で纏めよう……俺は、負けたんだな？」

煙と共に言葉が空へと立ち上れば、侍女の返答は早く、その上辛辣な代物で、

『勝敗とは同じ立場に居る者同士での言葉と思いますが……あえて言うならば、その通りです、ヴィクター様。貴方は負けました、完全に完膚無きまでに……それは文字通り手も脚も、何もかも出せないものであったなら、貴方は捉えられ腑分けされ、そして保管されておりました……終わってしまった実験のの証拠として、或いは善意の名の下に与えられるかもしれない、新たな機会を待つ心燈^{パイプ}として……若しくはエル・ゼノを荒らしていた警邏隊の敵、アステリオスという名の真なる《禿鷹》として……』

「……なかなか……言ってくれるじゃないか、メアリ……」

『どういたしまして。喜んで頂けて幸いです、ヴィクター様』

「だったらもう一つ教えてくれ……そんな俺を、どうして君は助けたんだ、メアリ？」

だからこそ、苦笑を抑えて出された返答への返答もまた単刀直入のものだった。

『……』

「そこだけが解らない……君は俺の正体を知っていて……君に与えられた役目は世話役兼監視係だったそうじゃないかい……つまり君は、メアリ、企業の為に動いていた、そうだろう？　だったら俺がエル・ゼノに楯突いた時点で、お役御免だと思うが、ね」

指と指の間に挟んだ紙巻から紫煙をただ上がらせるに任せつつ、ヴィクターはそう尋ねる　値踏みする様に、この電気仕掛の侍女をじいっと眺めながら。

『……確かにその通りです、ヴィクター様……』

そこで何拍かの空白を交え得たから、メアリは小さく、そつと唇を開けた　その表情は伏し目がちに、己が主人では無く風そよぐ大地を眺めたものであれば、変化自体は僅かなのにまるで違って見えるその顔付きに、お、とヴィクターは少なからずの驚きを覚え

言い返す事を忘れている間に、彼女はそれでも変わらない挙動と声音で持つて、一つ一つ積み重なる様、慎重に慎重にと、言葉を放ち始め、

『……私は自動機械です……貴方がたの様に心燈パイアなんて持つて

いなければ、ただただ設計された通りに動くのが目的の物であり、

また道具に過ぎません……そして、私の中の算譜機械コンピュータを設計したの

がエル・ゼノ社であれば、ええ、ヴィクター様、確かに貴方の仰られる通り、私は企業の為にこそ動きます……その企業が貴方の世話をしろというなら、私は貴方の世話を致しますし、貴方の監視をしろというなら、私は貴方の監視を致します……それ以上でも以下でも無く……ですが、ヴィクター様、ここに一つ、私の設計者達が見落としていた抜けがありました……或いは想定していたのかもしれ

ませんが……私には思考力が与えられていたのです……企業が与えた目的を如何に効率良く適切に処理する為の……侍女として、身近に居る者として、主人に不足無い様、行動する為の……であればこそ、貴方が処理された時、私の中の算譜機械コンピュータは、この様に判断しました……“企業の与えた目的に則り、主人たる貴方を救い出す”と……これは、別命あるまで本社付きとして待機、という風に目的が変えられた今になっても、依然、算譜機械コンピュータの奥深くに植え付けられた強い目的、と、言う風に判断がされたもので……だからこそ貴方は今、《ヴィクター・ナイト》なる器を持ち、企都ボリスを逃げ出し、こんな所で煙草なんて生体ウィオスに悪い物を、呑気に吸っていられるのです”

「……………」
『……お解り頂けましたでしょうか？ ヴィクター様』

そうして最後の件を一気に言い終えて唇を閉ざせば、言葉の波に圧倒されているヴィクターへ向けて、再び視線が、紫水晶アメジストの瞳が、強い眼力を持つて差し向けられ、

「成程……ねえ」

そこで煙草を咥え直しつつ思い浮かべるのは、フランク・レイニ―が述べていた心燈パイアの謎の一つであり 即ち、心燈パイアは何処から産まれるのか、だが、ヴィクターには、その答えが眼の前にある様に見えて仕方が無く その一方で、果たして彼女の言葉を鵜呑みにして良いのかという疑いもまた鎌首を擡げていた。何せ昨日の今日の事である 昨日が何時で、今日が何時かは置いといて 何から何まで騙されていて、何から何まで奪われ掛けた、その記憶も生々しければ生々しさすら持ち得なかったかもしれない事実に正直ぞつとする所で だからこれも、翻つての目的では無いかと、彼は考えたのである。企業に与えられた目的に則った目的に則った目的と ……

果たしてこれは心燈なのか、それとも そうヴィクターは視線を覚えつつ、短くも長く感じる時の中で、与えられた脳髓の皺という皺を駆使して熟考に熟考を重ねた、

「……あ」

そしてその挙句、彼は不意にこう悟ったのである。

そんな事は悩むにも値しないものなのだ、と。

命の灯火、究極の本質、絶対の真理　成程、今この時まで、無明とも気づかない無明の闇に囚われていた事を思えば、心燈バイアとは確かにその様なものかもしれない。フランクが、エルゼノの長が、そう称した様に　けれど、その男はまた同時に、《ヴィクター・ナイト》なる存在をして新手の自動機械オートマトンと呼んでいた　如何にして《彼》が産み出されたのかを思えば、それもまた真だろう　だが、数百年の歳月がその思考力を奪ってしまったのか、どうやらフランクは気付かなかつたらしい　心燈バイアを持つていながら機械であるとするならば、一体どれだけの市民が人間で失くなってしまふ事だろう。心燈バイアの有無こそは人間か人形か、生物か機械かを分け隔てる、唯一にして絶対の指標だった筈なのに

という事は、そもそもそれ自体が間違っていたと考えるべきで心燈バイアが要なのは覆しようの無い事実としても、それが目に見える物である以上、どれだけ神秘的に思えても、どれだけ美しく感じてオートマトンも、自動機械に置ける算譜機械と何ら変わりはないのだ。

ならばこそ、その有無を兎角悩む方が、気にする方が愚かというもの　そこまで考えてからヴィクターは、だったら何をと考えて直ぐにその答えを見出した。

そう、見出す　それこそが答えなのである。

命なんて本質なんて真理なんて　そんなものを今世の存在が直視出来る筈が無い、もとい、はつきりと見えてしまった以上、利用出来る様になった以上、それはただの物であり道具であり　虚偽に他ならないのだ。本物は、本当の心燈バイアとは、もっと解り難くて、目に入らなくて、それでも確かにあると思える　きっとこの煙の様なものに違いない。仄かに淡く紫と帯びながら、この狭間だからこそ垣間見える、薄明け時の空へと登って行く煙の様な　ヴィクターはそう感じた　感じた、と感じた。一体何処の四角四面バルパロイが

こんな訳の解らない事を想起させたか知れないし、それが正しいかどうかなんてそれこそ解らなければ、誰かに説明出来るなんて思ってもいなかったけれど、

『……ヴィクター様?』

少なくとも彼にとつてそれは真　そう思えるとすれば、ヴィクターは眼の前に居る少女を信じる事にした　心燈バイアを持たないと自称する、この電気仕掛の少女の事を

「……何でも無いよメアリ、気にするな……俺も気にしない事になったんだから」

まるでまた【非実在オフ】にされたかの様に押し黙って内省に耽っているのを見兼ねたメアリが、小首を傾げながらにそう訪ねて来るのをヴィクターは満面の笑みと共に返すと、煙草を挟んでいない方の手をそつと伸ばしてその白銀の髪をくしゃと撫でた　実はろくろく触れた事無ければ、それは生身の人間の頭髮とは明らかに違う、余りに艶やかで余りに鋭い人造毛であり、思つた程心地良くは無いというか正直ちよつと痛い、下手をしたら肌を切りかねない様な感触だったけれど、だが算譜機械コンピュータの発熱が為か、彼女なりの温かみは感じられ、

『お戯れを……その様な機能は御座いますが、よもや朝からするおつもりですか?』

「五月蠅いぞメアリ……折角こう、何というか……いやいい、気にするな」

けれど反応の程は然程でも無ければ、ゴホンゴホンと空咳を上げつつヴィクターは手を離れた　そのままメアリの横を通り過ぎ、浅い傾斜を上へ上へ、草を分け入り進んで行けば、その背中を侍女アメデイスは、紫水晶の眼だけで追つて行き、

『……私は別段構いませんが……それよりヴィクター様、どちらへと?』

「フランクと一緒にするんじゃない、お前は俺の侍女であつて巫女イターという訳じゃあ無いんだから……嗚呼、そうだな。煙草を貰つて点

火器もあつて、一服した……だつたらその次は決まつてるんじゃないかな、メアリ？」

「……何をされるおつもりですか、ヴィクター様」

オートサイクル

登つていった先の開けた片隅に、自らを騎手とするあの自動二輪が、側車^{サイド}も確かと備わっているのを認めると、ヴルンと近付いて来た黒い体軀を撫で撫でそう応え、それからゆっくりと振り返り

未だ小首を傾げたままのメア리를片隅と、エル^{ホリス}ゼノ企都^{ボリス}の外観を中央とその翡翠^{ヒスイ}の瞳に収めれば、大分短くなった煙草の先を都市へ向けて突き付けながら、挟んだ指を握り締めつつ ふと見れば携^モ帯^{バイル}端末は失くなっているけれど、だが目を瞑つて感じる力は、それを不要と見出させ 彼ははこう真顔で言い放つ。

「勿論灰皿を探しに、さ……メアリ……後始末はちゃんと付けなくちゃ、ね」

実際それは漠然としたものであり 見詰める侍女も首を戻せず 一体何から、何処から始めたらいいのやら、という所ではあつたけれど しかしヴィクターに後悔は無く、彼はその胸の内、産まれて始めての本当の自由を、これを手放す位だつたら、死んだ方がマシだと思える程度の気概を感じ取っているのだつた

……この力を皆に分け与える事が出来ていたならば、どんなにか良かっただろう。

くしゃり灰と化した大地を掴みながら、アステリオスは アンリ・カンデラは、そう思わずには居られなかった。

究極たる焔に不死の体 それをもし皆が持っていたならば……けれども仮定は仮定に過ぎず、輝く火の涙を拭い払つて、彼はすつくと立ち上がった。

そして歩き出す 東へと、今しも太陽が昇らんとする地平線へと向けて。

宛なんか無かったし、目指す先は何処までも平らな灰が続いてい
たが、しかしアンリは止まらない 一人でもいい、一匹でもいい
……何処かにきつと居る生存者を探す為に、彼はその脚を動かし始
める。

何故ならアンリは神なのだから 例えそれが眷属と呼ぶにも覚
束無い紛い物であつたとしても、例えその身が罪に塗れ、どす黒く
汚れていたとしても 彼にはまだ力が残っており、そしてそれを
行使せんとする意思があるのなら、彼は人であると共に神であり、
その動機もまた揺ぎ無い。

そう 神とは、民の為にこそ在る者なのだから……

「J・O＝ネルレラク『フューチャー未来のプロメテウス』「たひだち東方への出発」

やがて灯はまた輝くだろう……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065w/>

プロメテ=オートマティクス Promethee Automatics

2011年11月10日03時11分発行